

---

# 郵便屋 -死者の声届けます-

藍崎どーなつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

郵便屋 - 死者の声届けます -

### 【NNコード】

N4472X

### 【作者名】

藍崎ビーなつ

### 【あらすじ】

家の郵便受けを覗いてみたときに「郵便屋」の判子が押された手紙が届いていることがあるかもしない。その手紙の内容は世間話だつたり怨念だつたり恋慕だつたりと様々だが、共通して言えることは、その手紙の差出人が皆「死者」であることだ。

「天国からの手紙なんて、そんな良いもんじゃないよ  
郵便屋の少年は今日も業務に励んでいる。

## 郵便屋です

「いらっしゃい」

街の中のビルとビルの間。その小さな道を通り抜けて右に曲がる  
とその店はある。

「代筆ですか？配達？  
それとも両方？」

店、というのも妙な感じがするぐらいに小さなその建物には、若  
干色褪せている「郵便屋」と言つ看板がかかっていた。

そここの店主は年齢的には中学生ぐらいの少年で、紺色のパーカー  
を着て、そのフードを目が隠れる程度に深く被つている。

そう、彼の仕事は郵便屋だ。

ただし、商売相手は「生きている」人間ではなく「死んだ」人間  
である。

「お代はいかがいたしますか。

現金？物品？魂の一部？」

少年は今日も業務に励んでいた。

## 新便箋の仕事（一）（前書き）

はじめまして。

藍崎どーなつと申します。

読みにくい文章となつてこます。『めんなせー』。

がんばつて書きあますので、よろしくお願いします。

## 郵便屋の仕事（1）

「……はあ

握り締めていたペンを置き、一息つく。

後一文で今日の依頼は終了だ。気合を入れなおす。「この場所にありますから、大切に使ってください。これからもお元気で」

もう一度ペンを握りなおして、最後の一文を書き終わると、今度こそペンを放り投げた。

これは、僕の仕事だ。

手紙の代筆をして、頼まれた住所まで配達。あと、依頼があればその後の「送り先」の経過の報告をすることもある。まつとうな職なんかじゃない。

というよりも、依頼人が「死んだ」人間では、まつとうも何もないだろう。

『もう書き終わったんですか？』

さつきまでどこかに行っていたはずの今日の依頼人がいつのまに帰ってきたのか、僕の手元にある紙を覗き込んだ。

「終わりましたよ。今日はもう遅いので、配達は明日でいいですか？」

？

『かまいません。急ぎではありませんから』

長い髪を低いところで束ねた30代ぐらいの女性が、苦笑いを浮かべて部屋を浮遊している。

「事後報告はりますか？」

『いえ、必要ないです。』

私が突然死んでしまったものですから、残った主人と娘が心配だつただけですから

女性は、やうに苦笑いの「苦い」の部分を強めて笑つた。

僕はその様子を気にすることもなく、背後の戸棚から真っ青な封

筒を取り出して宛名と差出人を書き込む。

「宛名は田村健一様、差出人田村鈴子……で、間違いありませんよね？」

最終確認のよつこにたずねると、女性……田村さんはしつかりとうなづいた。

「では、間違いなく」

宛名と差出人を書き込んだ封筒に80円切手を貼り付け、「郵便

屋」と書かれた判子を押す。

「明日の正午にはお届けしますので、気になるようだつたら直接見に行つてください」

客相手に礼儀の無い態度だといつ自覚はあるが、直すつもりも無いので素つ氣無くそう言つと、田村さんの目を覗き込んだ。

彼女は気になった様子もなく、『ありがとうございます』と言つて笑つとふつと消えていなくなつた。

時刻は真夜中の1時。

僕は大きく伸びをしてからそのまま畳に寝転んでそばこある布団を手繕り寄せる。

電気はつけっぱなしで畳を閉じた。

基本的に、僕の睡眠時間は「一般の人」と比べると極端に短い。何故なら僕のお客さんは、時間なんて気にすることもなく店に入つてくるからだ。

自分たちもついこの間まで生きていただろに、死んでしまつて魂だけの存在になつて、眠る必要がなくなつた途端、時間の感覚がなくなるらしい。

いい迷惑だ。でも、仕事だから仕方がない。

「……いらっしゃい」

「気配を感じて田を開けると、既に次のお密さんのお待ちかねだつた。

本日の睡眠時間1時間。明日まとめて配達に行って、帰つて寝よう。

明日も中学校は行けそうに無いな。行くつもりもないけど。

「代筆ですか?」

茶髪の髪にゆるくパークをかけ、短いスカートにサンダル姿の若い女性が小さくうなずいた。

『彼氏に、手紙を』

「代償のお支払方法はいかがなさいますか?」

『……魂で』

「かしこまりました」

きつと、この人は死んだばかりなんだらう。

近くにいた「同類」に僕のことを聞いたのかもしれない。

「魂」で、という声に、若干の抵抗が見られた。

「では、お手紙の内容をお伺いしますので、書きたい」とを全部しやべつてください」

『……全部?』

「はい。覚えますから」

女性は、少しうるたえたようだが、小さな声で手紙の内容をしゃべりだした。

「では、以上でよろしいですか?」

『はい』

女性の言つた手紙の内容は、一般的な恋人に向けた別れの手紙だつた。

ありきたりだなー、なんて失礼な感想を抱きながら、僕は次の言葉をつむぐ。

「それでは、先に代償を頂戴いたしますね」

僕のその言葉に、女性が見るからに緊張した面持ちに変わった。  
きっと「魂で支払い」という未知のものに恐怖を抱いているんだ  
らうな。

それに気づいてはいたけれど、僕は気にせずに指を女性に向かた。

時間にして、一秒にも満たない。

魂の回収は終了する。

「はい、ありがとうございました」

『え、もう終わりですか?』

案の定、女性は拍子抜けしたように目を瞬かせていた。

僕は、少しだけ苦笑いを浮かべる。

といつても、目元までフードで隠しているので、ほとんど表情は  
見えていないだろうけど。

「はい。終わりです」

『……簡単なんですね。魂で支払いって言つから……』

「簡単ですけど、魂で支払いってことは「この世にござれる時間」  
を縮めていますから、あんまり魂でばかり支払いしてると、消え去  
つてしまりますよ」

僕にしてはおせつかいなその言葉を彼女に投げかけたのは、手紙  
の締めの文章が、いかにもまた手紙を書きます、と言つたものだつ  
たからだ。

魂で支払い、ということは、生きている人間で言う「寿命」で売  
買をしていることに等しい。

『肝に銘じておきます』

女性はここに来てよひやくゆるく笑つた。

「では、僕は今から書きますので、ここにいてもうつても結構です  
し、どこかに出かけていただいてもかまいません」

『あ、はい。よろしくお願ひします』

女性は、また小さく頭を下げる、『一寧にドアをすり抜けて出て行つた。

僕は独りになつた室内で、ペンを握り締めた。

郵便局の仕事（一）（後書き）

11月19日 少し修正しました。

## 郵便屋の仕事（2）

手紙の代筆が一通り終わり、大きく伸びをして時計をひらりと見やつた。

2時30分。依頼人がやつてきてから30分近く経過している。まあ、15分程度で書き終わつたし、上等じゃないかななんてと考えて、ふと顔を上げると依頼人の女性が浮かんでいた。

『字、綺麗なんですねー』

多分、純粹に褒められているんだと思うけど、僕は淡淡とした口

調で「それが商売ですから」と返す。

「では、明日の昼時にお届けします」

『よろしくお願ひします』

女性はぺこりと頭を下げた。

最近の依頼人はなんだか礼儀正しい人が多いな。

少し前まではふてぶてしい態度で『もつと早く届けられないのか』とか言うやつ、結構いたのに。

僕は少しだけいい気分で、宛名と差出人を再確認する。

「宛名は杉原太一様、差出人は横間理穂、でよろしかつたですか」

『はい』

女性もとい横間さんがうなずくのと同時に、僕はまた青い封筒に

さらさらと名前を書き入れ、切手を張り、判子を押した。

「で、事後報告は必要ですか？」

『事後報告……ですか？』

僕の質問に、横間さんは首をひねる。

どうやら、そこまで詳しくは無かつたようだ。

僕にしては丁寧に説明することにする。

「手紙を確かに手渡したという証明をするサービスです」

丁寧に説明したつもりだつたけれど、いつもと変わらなかつた。

『……それって、何か意味あるんですか？』

横間さんが首をかしげている。

確かに、この業務にあまり意味は無い。

靈になってしまえば、一部例外を除いて、壁も何も関係なくすり抜け、ものを見ることができる。

自分で生きている人間に意思を伝えることはできなくとも、僕が手紙をきちんと渡したかなど、確かめることは容易だ。

この事後報告の意味は、他にある。

でも、きっとこの女性には必要ないだらう。

「まあ、しいて言えば、その証明で依頼人との正しい信頼関係を築くためですかね」

『……はあ。 そうなんですか』

だから僕は適当な理由を述べて、彼女もそれで納得したようだつた。

『じゃあ、必要ないです。郵便屋さんのこと信用しますし、信用がなければ自分で見に行けば言いだけのことですしね』

横間さんはやはりそう言って、『では、よろしくお願ひします』ともう一度頭を下げた。

「……寝るか

再び僕独りとなつた部屋の畳の上に寝転がり、もう一度布団にもぐりこむ。

このまま依頼人が来なければ、畠まで寝ていることにしよう。

田村さんの手紙の相手は、割とこの近くにすんでいるから、11時に出れば畠前に間に合つだらうか。

横間さんは、電車を使わないとな。

そんなことを考えている途中で、僕の思考は完全に停止し、深い眠りについた。

翌朝（）といつても、「翌」ではないし、起きたのも「朝」とは呼

べない時間帯だが）、僕は一つの手紙をかばんに入れて、店を出た。きつちりと「鍵」をかけて、配達中の看板をかけ、歩き出す。

確かに、靈は鍵も壁もすり抜けられるけれど、あの店の「鍵」は特殊だから、僕が外出中に店に入ることはできないし、普通の人間はあの店に気づかないから、泥棒に入られることは無いだろう。

そもそも、人間が入ったところで金目のものは何一つおいてないし、靈が入ったところで彼らは物理的にものに影響を及ぼすことができないのだから、厳重すぎる「鍵」かも知れないけれど。

そんなことを考えながら、フードを深くかぶりなおした。

こんな奇異な格好だから、人にじろじろ見られる事は多々ある。でも、僕は気にすることをしない。

声をかけられるわけじゃないし、ましてや通りすがりにフードを引っ張つて脱がすような常識はずれな人間もいない。

自分からこんな怪しい人間に近寄つていく変わり者なんて、そういうない。

だから、この田元まで隠したフードの少年ぐらい、時間がたてば忘れられるだろうと考えている。

世の中には、もつと奇抜な格好をした人間がごまんといいるのだし。

「2・35：ここか

田村さんの住所は難なく発見することが出来たので、迷いなく据え付けの郵便受けに青い封筒を入れた。

その音に気づいたのか、依頼人の夫と思われる男性が出てくる。僕は少しだけ足早にその場を離れ、手紙を手に取った男性の様子をちらりと伺つた。

どうやら、イタズラか何かだと思つて少し憤慨したように、眉を寄せている。

そりや、そりやうな。

死んだ人間から手紙なんて、普通あり得ないし。

それから男性が手紙を信じようが破り捨てようが、僕には関係のないことなので、次の住所を田指してその場を後にした。

カタンカタンと電車が心地よく揺れる。

横間さんが指定した住所はあと1つ駅を通過したところの最寄だ。  
しばらくの間、することもなさうなので景色を見つめてみる。  
吊革につかまりながらぼんやりとしていると、車内に何やら「怨  
念」をぶつけようとしている男性の靈を発見した。

「……こんな人の多いところでやらなくてたって  
僕はポツリと呟いてから小さくため息をつく。

無視しようかとも思つたが、余波がこっちに回ってきて気分が悪  
くなるようなことにはなりたくないでの、今のうちに破壊しておく  
こととする。

ちょうど、電車が停車し、人が移動を始めた。  
じきくさにまぎれて、その靈に近寄り、肩を小さく叩く。  
すると、その靈は怨念だけを残して消え去る。  
後は「怨念」を回収し、霧散させるだけ。

「……」

それが終わると、僕はさつきの場所に帰つてまた吊革につかまつ  
た。

靈の呪い、というものは大半が勘違いだ。

何故なら、靈は人間に物理的な攻撃ができないからだ。

ものが突然飛んできたり、靈が人を消したり、そういうことは、  
大抵の場合違う理由がある。

だけれど、怨念というものは確かに存在している。

それは死んだ人の思いの塊で、それをぶつけられると頭痛がした  
りするなど、体調が悪くなる。

もちろん、ぶつけられたって何も感じない人間もいるけれど、感  
受性の豊かな人間は自分に向けられた怨念でなくとも体調に異常を

きたすらしい。

これは師匠の言つていた言葉なので、僕は本當かどうか知らないけれど、怨念が存在しているといつのは事実だ。

そして僕は靈とともにその怨念を見ることができ、またその怨念は「触れるもの」が触ると簡単に霧散してしまう代物なので、僕は自分が巻き込まれる前に霧散させることにしている。

「……駅に到着いたします。お忘れ物などございませんよう気をつけて……」

と、ぼんやりしている間に次の駅に到着していた。

僕はフードを今一度深くかぶりなおし、電車から降りる。改札口を出て、僕は住所と地図を記憶から引っ張り出し、そちらの方へ歩き出した。

土地勘はあるわけではないが、筋金入りの方向音痴といつわけでもないので、地図さえあればそれなりに歩き回ることぐらいできる。僕は時折電柱に貼り付けられた「ここは3丁目です」という文字を見ながら歩いた。

「……ここか

見上げると、それなりの大きさのアパートがある。

一般的な独り暮らしの大学生や高校生は住めないくらいの大きさはあつた。

横間さんが社会人だったんだから、彼も社会人である場合が多いだろう。

僕は特別何も考へることなくアパートに近づき、郵便受けを探した。

「305……305……」

集合住宅らしく、101から609までの郵便受けがずらりと並んでいて、僕は少しだけ気が滅入った。

そして、ようやく305の郵便受けに手紙を入れ、今日の業務は

終了と伸びをすると、後ろに人の気配を感じた。

これは靈じゃない。生きた人間だ。

ここアパートの住人が帰ってきたのかな、と、僕は特別深く考えるでもなく振り返り、歩き出す。

スーツを身に着けた男性は、仕事帰りなのか手にコンビニの袋をぶら下げていて、まだ昼時なのに早い帰宅だな、と僕は他人事のように思った。

「……君、今305の郵便受けに何かしてただ」「その男性に話しかけられるまでは。

「そこは僕の部屋の郵便受けだ」

そして、気づく。彼が依頼人の恋人の杉原太一であると。厄介だな、と心の中で毒づいた。宛先の人物に会つて、良かつた経験なんて今まで一度も無い。

「何かいたずらでもしていたのか？中学生だろう。学校はどうしたどうやら、横間さんの恋人は、まじめな社会人のようだ。確かに、僕のこの格好を見たら怪しむとは思つけれど。何せ田までフードで覆つているし。

何か悪さをしていて、そのため顔を隠していると勘違いされても仕方がない。

「何か言つたらどうなんだ」

「ご近所のことも考えてか、彼の声は少し小さめで、だけど声に迫力があつた。

「……頼まれたことをやつていただけですけれど」

本当は頼まれた、というよりこれが僕の仕事なのだけれど。

そんなこと教えてもどうにもならないのでそういうことにしておく。

「頼まれた？誰に？」

どうやら、使い走りだと勘違いされたようで、彼は眉を寄せた。もともと釣り目のようだか、さらに田が釣りあがつている。

「横間理穂さんに」

そして、僕が正直に答えると、彼は目を見開く。  
その隙に僕は走り出した。全速力で。

「こり、待て！ふざけるな！」

慌てて彼も追いかけてくる。

やつぱり驚かせて逃げようというのは計画として杜撰すぎたらしく、普段運動をしない僕はすぐにつかまつた。

逃げ切れるとは思つていなかつたけれど、近くにある人がいない公園まで引っ張つていかれるとは予想外で、僕は心の中で舌打ちをする。

パークーの袖をつかまれて、所謂強制運行という感じでベンチに座るように促された。

「どういうつもりだ」

「何がですか」

「何故彼女の名前を知つてているのかと聞いているんだ！」

彼は、そう怒鳴つて僕の方を睨む。

「本人に聞いたからですよ」

「はあ？」

「だから、本人に聞いたんです。彼女の名前も、貴方の住所も」  
僕は平坦な口調で淡々と事実を告げた。

だが、もちろんそんな話が信じてもらえるわけではなく、「だからふざけるなつて言つてるだろ！」とまた耳元で怒鳴られる。

「彼女は死んだんだよ！2週間前に」

「知っています」

「お前、」

「貴方が認めようが認めまいが、関係ありません。

僕は、彼女から頼まれたんです」

彼は怪訝な表情で僕を見て、僕は下を見ていた顔を上げた。

「郵便受けに入れた手紙、僕を怒鳴る暇があつたら読んでください」  
そう言つて立ち上がる。

「おい、待て」

「その手紙を読んでも言いたいことがあるのなら、聞きますよ  
僕はそれだけ言って、歩き出した。  
彼は、僕の言葉の信憑性を疑っているのか、つかみかかって怒鳴  
ることはもうしなかった。

## 郵便局の仕事（4）（前書き）

誤字脱字などあつましたら、教えていただけると助かります。

## 郵便屋の仕事（4）

『あの……郵便屋さん』

杉原さんを置いて家に帰るのと歩き出し、暗い路地に入ったところで僕は女性に話しかけられた。

「ああ、横間さんでしたか」

そこに立っていたのは、おそらくさつきのやり取りを見ていたであろう彼の恋人で、

『……なんで、あんなこと言つたんですか？』

「あんなこと？」

人気の無い道だから、何の躊躇もなく彼女と会話ができる。きつと、横間さんもそれを狙つて話しかけてきたんだろう。

彼女は、少し口ごもりながらも僕に尋ねる。

『私に、頼まれてやつたつて、なんでそんなことを？』

「だつて、事実じやないですか」

『でも……』

眉をひそめている彼女。正直、そんな顔をしたいのは僕のほうだ。

「何か間違つたことがありましたか？」

『いえ……そういう訳じや。』

でも、太一私が死んで間もないのに、私に頼まれたなんて言われたら戸惑うんじやないかって……』

『じゃあ、何で手紙なんて書いたんです？』

『え？』

口調は変わつていないつもりだ。でも、内心はとてもいらっしゃっている。

『あの人宛に手紙書いたじやないですか。』

死んだ恋人から手紙が来たつて、同じことですよ。

それに、あの場でああ言わなかつたら、僕は下手したら警察署に連れて行かれてますからね。

そんなことは「ごめんです」

『……そりですよね。ごめんなさい』

横間さんは、深々と頭を下げて、消えた。

店に帰ると、まず「配達中」の看板をはずし、一緒に鍵もはずした。

すぐさま倒れこむように置に寝転がり、布団を頭からかぶる。

「……」

寝ようと思ったが、思いの外頭がさえてしまい、電車で靈を「消した」せいだということに気づく。

内心舌打ちをして、だけ起きて起きたのも面倒に思えてそのまま思考だけ働かせた。

「……恋人、ねえ」

残念ながら人生経験の浅い僕にはそんなものは存在したこともないし、ついでに言えばこれから先も存在することは無いだろう。

僕が接している人間は「生きている」人よりも、明らかに「死んだ」人のほうが多い。

学校にも必要なときしか行かないし。

先生たちも、それで納得している（師匠にさせられた）し。

つまり、生きた人間とのかかわりが薄い僕には恋愛感情がわからぬいから、彼が横間さんの名前が出てきてあんなに怒った理由も、彼女が杉原さんに余計な事を言つたように見えた僕を責めた理由も、わからない。

「そんなに、大切な物のなのが」

結局は赤の他人なのに。

血のつながりも無いのに。

「……わからない」

口に出していくたら、余計にわからなくなつたような気がして、僕は考えることをやめた。

『「んばんは……』

「……いらっしゃいませ」

どうやら、結局僕は眠つてしまつていたようだ。

ふと目を覚ますと、横間さんが僕の顔を覗き込んでいた（といつても、フードはかぶつたままなので僕の目は相変わらず見えていなければ）。

僕は少しだけ驚く。

今日は来ないだろうと思つていたから。

『「昼間はすみませんでした』

彼女はまた深々と頭を下げた。

「いえ、よくあることですから」

僕は何も考えずに本当のことを答える。

『「あんな失礼なことを言つてしまつて……』

だが、彼女は僕が社交辞令を返したんだと思つたようで、また深々と頭を下げる。

あまり、人に謝られなれない僕は、頭を搔いてから「本当に氣にしてませんから」とだけ告げた。

「もつと壮絶な文句を言われてことだつて、何度もありますし。

「いらっしゃこそ、気が利いたことが言えなくてすみません」

だから、これでお相子にしましょ。

そう言つと、彼女はようやく弱弱しくうなずいた。

『「手紙、今日も書きますか？」

『「……実は、そのことなんですけれど』

「？」

僕は仕事をしようとしてペンを持ち上げかけたが、彼女が言いよどむので顔を上げる。

『「手紙、書くべきなんでしょうか？」』

「……」

そんなことを言われても。

僕は心底悩んでいる様子の横間さんを目を剥いて見上げた（とい

つても、彼女には顔を上げたようにしか見えていないだらうけど。

『あの後、私の手紙を見た彼の様子を伺つていたら、私がやつていることつて間違つてるんじゃないかなって……』

そんなことを言われても。

返す言葉を見つけることができず、僕は黙つたままで横間さんの言葉を聞いている。

『彼、泣いてたんですね……』

「……はあ」

あんな剣幕で「嘘をつくな」と叫んでいた男性が泣いていたのか。それは見てみたいものだつたな、と、場違いなことを考えながら彼女に先を促す。

『悲しませるつもりは無いんです。

ただ……先に死んだことを謝りたかったんです。』

確かに、彼女の手紙は謝罪の言葉が他の人よりも多かった。

僕はそれを思い出してうなずく。

『でも、言いたいことがいっぱいになつちゃつて、ついついまた手紙書きます、なんて書いてもらつてしまつたんですけど……』

私の存在が、彼の今後の生活の邪魔になつてしまつていてのなら、もう書かないほうがいいんじゃないかなって。

彼女はそれだけ言つと、うつむく。

僕は再び言葉に困つて頭を搔いた。

気の利いた言葉も見つからず、仕方がないので、思つたことをぶちまけてしまつことにする。

『そんな風に言つなら、最初から手紙なんて書かなきや良かつたじやないですか』

『え?』

『杉原さんの今後の生活の邪魔になんて、一通手紙を書いた時点でなつてますよ。今更です』

『……そうですね』

僕の言葉に、横間さんは目を見えて落ち込んだようだつた。

その様子が可哀想になつた訳では無いけれど、僕は先を続ける。  
「きっと、彼は貴方の次の手紙を待っていますよ。

泣いていたつてことは、僕がしたこと悪戯じゃないつてわかつて  
もらえたみたいですし。

ここで書くのを辞めたら、それこそ裏切りで、彼が貴方を忘れら  
れない原因になります。

だったら、言いたいこと全部書き終つてしまつたほうが、いいん  
じゃないですか？」

『……』

彼女は、ゆっくりと顔を上げた。

『……そう、ですよね』

そう言つて、彼女は『支払いは魂でお願いします』と笑つた。

## 郵便屋の仕事（5）

横間さんの手紙を書き終わった後、僕は店の裏にある風呂場に行つた。

食事はしなくても問題ないし、食事をしないから当然排泄もしないけれど、体だけは毎日洗わないといつぱりもないでの、店の裏に作つてあるのだ。

鍵を開けて中に入り、今度は中から鍵をかける。

人も、靈も入つてこないよつに、厳重に。

「……はあ

服を脱いで、軽く頭を振る。

風呂に入るときは、僕が唯一フードをはずすときだ。

誰にも見られるわけにはいかない。

少し古いシャワーは金属音を鳴らしながらお湯を出した。  
どちらかというと灰色に近い黒髪が、水に濡れて束になる。

「シャンプー、どこやつたつけ

独り言を呴きながら、前髪を手で持ち上げ、一回ふりに良好になつた視界に自嘲気味に笑つた。

この風呂場に鏡は存在しない。

僕が、意図的につけなかつた。それだけだ。

この「化け物」と揶揄される目を自分で見ることができないから。  
見るのが、怖いから。

「まだまだ、弱いな、僕も」

シャンプーを手にとつて、ぐしゃぐしゃと頭を搔き回す。

師匠がいなくなつて、もう3年がたつといつのに、僕はまだまだ精神的に弱いままだ。

師匠は「お前はもう大丈夫だから、この店は預けるな、じゃ！」

と言つて、僕にこの店を押し付けて、どこかに旅に出でしまつた。

一応まだ連絡は来るから、師匠も生きてはいるんだが。

日本にいるんだか、海外にいるんだか知らないけれど、いつ戻つてくるんだろうか。

本当に、適當な人だ。

修行だなんて言つて、僕を「怨念」の中に突き落としてみたり、僕の記憶力をあてにして、競馬の統計を作らせてみたり。

「……」

師匠のことを考えたら、なんだか頭が痛くなつてきたので、考えることを放棄する。

一瞬頭の中に浮かんだ白髪の髪の毛をいつも輪ゴムで束ねていて、アロハシャツを着るのが大好きだった「ご老体」を頭を振つて消し去つた。

やつぱり、もう帰つてこなくていいです、師匠。

店のほうに戻ると、誰かが来た形跡は無かつた。

今日は珍しく、睡眠時間がたつぶり取れるかも知れない。

僕は部屋の電気は切り、枕もとにおいてある小型ライトだけつけて布団を頭からかぶつた。

明日は横間さんの手紙以外の配達は無い。

一軒しか配達が無いのは、久しぶりのことなので、明日も客の数によつては自由な時間が増えそうだ。

中学校の定期テストまではまだまだ日にちがあるので、学校に行く必要もない。

だからといつて、明日何かすることがあるかと言えば答えば「NO」なので、明日は上手くいけば半日近く寝て過げ」すことができるだろ。

「……とりあえず、今日は寝よつ

僕は自分に言い聞かせるよつとそつとして、まぶたを閉じた。

翌日、僕は昨日と同じ電車に揺られながら、また昨日と同じ目的地を目指していた。

昨日はばつたり杉原さんに出くわしてしまったが、今日は昨日よりも早い時間帯だし、彼はいないだろう。

僕は確信じみた何かを感じながら、ぶら下がるように吊革につかまっていた。

「……あれ？」

そうしていると、車内の様子が何かおかしいことに気づく。

そのままの体勢で、きょろきょろと周りを見回すと、昨日もこの電車に乗っていたサラリーマンがいることに気づいた。

しかもあの人は、昨日怨念をぶつけられかけていた、あのサラリーマンだ。

その人の肩に、「怨念」を抱えた靈が乗つかつていた。しかも、

昨日僕が「消した」靈とは別の。

（……どんだけあの人死人に恨まれるようなことしてんだよ）

僕はそう思いながら、新聞を読むサラリーマンを見る。

今度の靈は、昨日のとは違ひ怨念を「ぶつける」のではなく「乗せる」タイプのようだ。

怨念をぶつけるほうが弱い思念で強い効果をもたらすことができ、その代わり周りの人間にも被害が被る可能性があるのに対し、怨念を乗せるのにはかなり強い思念がないとあまり効果は期待できないが、周りの人間に被害は全くでない。

……らしい。

これは師匠が言つていたことだし、僕は怨念をぶつけられたことも乗せられたことも無いので本当のところはわからないが、きっと間違つてはいないんだろう。

適当な人だつたけれど、知識だけは多かつたから。

今度の靈はサラリーマンに怨念を「乗せ」ようとしているだけの様子なので、僕に被害はなさそだから、不用意に靈を「消す」の

も怨念を「書き消す」こともしない。

冷たいと言われるかも知れないが、そもそも、そこまで人間に恨まれているあのサラリーマンもどうなのだ。

僕に被害が来ないなら、僕の知ったことではない。

そんなことを考えている間に、あのサラリーマンは怨念と靈を肩に乗せたまま電車を降りていった。

## 郵便屋の仕事（6）

昨日見つけたばかりの郵便ポストを忘れることがなく、僕は難なく杉原さんのポストに青い封筒を投函することができた。

「さて、と……」

帰ろうと後ろを振り返ると、そこには何故か横間さんが立っていて、僕は首をかしげる。

杉原さんに用事があるのだろうか。

でも、今日は平日なのだから、杉原さんはここにはいないはず。昨日あの時間帯に帰宅していたのは謎だけれど。

そこまで考えてから、まあ横間さんが関わりたい相手が彼だけであるとは限らないか、と思い至り、何も考えずに通り過ぎることにした。

『あの……』

した、のに。

何故か横間さんは明らかに僕に話しかけてきている。

僕は再び首をかしげた。

「……」

とりあえず、こんな人目につくところでは話しかけることはできないので、少し離れた裏路地に入りこむ。

「……何ですか？」

『もう、手紙出しちゃいましたよね？』

「はい」

苦い顔をした彼女は、僕の即答にうつむいて見せた。

僕は少しだけ眉をよせて（と言つても、彼女には見えていないだろうけど）横間さんに問いかける。

「何がありましたか？」

『……いえ』

そう言って彼女は首を振った。

「そうですか」

だつたら僕には関係ない。僕は再び歩き出す。

横間さんは僕をちらりと見やつてから、すぐ「じどり」かに行ってしまった。

彼女は何を言いたかったのだろうか。

少しだけ考えて、すぐに止めた。僕には、どうせわからない。

「……面倒事に巻き込まれなきやいいけど」

以前巻き込まれたことがある厄介なもめ事を思い出し、うそぎりした。

「では、今から書きますので、お好きになぞつていてください」

『よひしく頼む』

店に帰ると、新たな客が店の前に佇んでいたので、すぐに話を聞いて代筆を始める。

60代ぐらいの男性は、娘とその婿、それから孫に対する想いをつらつらと述べていた。

手紙を書きながら、僕の記憶には全くない自分の「祖父」というものを考えてみる。

今までの依頼人も、高齢の方が多かったこともあり、いろんな姿を想像できるが、それに現実味があるかと言われば否だ。

どんな姿を思い浮かべても、どんな口調を思い浮かべても、どんな性格を思い浮かべても、それが自分を叱つたり、褒めたりしているところはどちらにも考えられない。

そうしていふうちに頭の中に「おじいちゃんだよ」と手を振る師匠が浮かんできたりしたらたまたものではないので、僕はすぐに考えることをやめた。

そうすると、自然と浮かんでくるのは横間さんのことだ、僕はふと手を止めた。

もう手紙を出してしまったのか、彼女は言っていた。

ところが、手紙を出すのを止めたかったということだらう。

……何故？

今日は店を訪れる様子のない横間さんを思い出して、僕は三度首をかしげた。

その翌日も、翌々日も、彼女はやつてこなかつた。

だからと書いて、僕の生活には何ら変化はなく、依頼人が来たら

それに応え、来なければ寝て過ごす。

それだけだ。

「今日は配達2件」

呟いてから青い封筒を鞄に入れる。配達先はどれも割と近所で、歩いて配達できそうだ。

立ち上がるごくしゃぐしゃの布団が肩から落ちた。

もちろんそれを気にすることはなく扉を開けて、配達中の看板を手に取ろうとした。

した、けれど。

「……何であんたがここにいるんだ？」

思わず目を見開いて尋ねるほど、僕は驚いた。

そこには、狭い路地を通りうと必死で、スーツがすすぐらけになつている、杉原太一がいた。

「ちょっと、この道どうやつて通るんだ！」

唖然としている僕と目が合うと、彼はそう言って叫んだ。彼の後方には、通行人が彼を怪訝な表情で見ている。

が、彼はそれに全く気付いていないらしい。

僕は仕方がないので、大人が通るには難しい隙間を普通に歩いて通り抜け、彼の前に立つ。

「……何してるんですか？」

杉原さんは僕の問いかけに答えることはなく、スーツについたすを払つていた。

それから「こんなところに店を構える必要はないだろ？」「などとぶつぶつ文句を言い、相変わらず唖然としている僕を見る。

そして、眉にしわを寄せてから、浅く頭を下げる。

「……」の間は、すまなかつた

はい？

何を突然言い出すんだ。

僕はさらに唖然として普段の自分ならあり得なしくらいほかんと口を開けた。

おの……間に悪魔してると決めておいたにかすことかねた

……ああ、あの事ですか

アーチモで来るが、と首をかしげる

別に もうあることだし あんなふうに言わ  
怒ることは当たり前だと横間さんも言っていた。

だから、それだけを言いにここまで来るなんてことはないと思つ

セーブル都心ヒルズの隣に位置する

「河で、二三さんがわかつたんですねか？」

「この男性は、どうしてこんなわかりにくい、というより絶対に気がしない場所で、こんな話を聞くナニがいるの？」

郵便屋といつても、生きている人間の客なんてほぼ皆無に等しい

から他人から聞いたというのは考えにくい。

「新編 金瓶梅」

卷之三

をよせる

現れであります。相間で何かとがねじて思ひ出され 徒はその

卷之二

卷之二

それで、追いかけていたら、ここについた。

それで、郵便屋つていう看板が見えたから、君を思い出したんだ  
紺色のパークーの少年が持ってきた手紙には「郵便屋」という判  
子が押されていたはずだ、と。

「……はあ

それで、どうしてここに来たんだ?と、僕が相変わらず眉を寄せ  
たままでいると、彼はその答えを与えてくれた。

「理穂に会わせてくれ!話がしたいんだ!」

彼の手には、僕が代筆した手紙である青い封筒がしつかり握られ  
ていることに、僕はようやく気付いた。

## 郵便局の仕事（7）（前書き）

誤字脱字などあつましたら、「」指摘いただけすると助かります。

「……は？」

僕は思わず口をぽかんと開けて聞き返す。

「だから、理穂に会いたいんだ！」

「……会いたいって言われても」

手に力を込めてそう叫ぶ杉原さんに僕は困惑していた。困惑しているうちに、自分たちが通行人にものすじく怪訝な目を向けられていることに気づく。

「とりあえず、場所を変えませんか」

僕がそういったところで、彼はようやく注目されてしまっていることに気づいたようで、小さく咳払いをして「そうだな」と言った。彼につれられて、近くの喫茶店に入る。全国チェーンの割と大きな店だ。

朝早くから営業しているその店は、9時過ぎだといつのこと、思いの外、人でごった返していた。

「何か食べるか？」

僕の正面に座った彼はそう問いかけてきて、おじるから、と付け足す。

「……アイスココア」

正直空腹感は全く無かったが、せっかくの提案なので無下にはできず、僕はそう頼んだ。

杉原さんは自分の「コーヒー」と僕の「ココア」を注文して、しばらくの間沈黙が流れる。

簡単な飲み物だったためか、すぐに飲み物は運ばれて、一口飲んだところで杉原さんが沈黙を破った。

「で、話はさつきの通りなんだが」

「……とは言われましても」

僕はストローをくるくると回しながら答える。

氷がガラスのコップにぶつかって音を立てた。

「僕は死んだ人間を見ることはできても、その人を束縛する力はありませんから」

だから、横間さんが今どこで何をしているかなんて把握していないし、いつ店にやつてくるかもわからない。

正直にそう答えると、杉原さんは頭を搔いて呟いた。

「そりや、そうか」

「申し訳ないんですけど」

靈というのは死んだ人間の魂であり、意思にエネルギーが付着した状態だ。

このエネルギーは靈が活動していると自然と消費されるもので、また、このエネルギーが尽きるまでは地上にいなくてはならない。つまり、僕が代償としてもらっている「魂」とはこの「エネルギー」のことであり、エネルギーが尽きてしまつと靈は地上にいることができなくなる。

もちろん、「例外」もいることはいるが、大抵の靈はそうなのだ。その靈がもつエネルギーの量には個人差があるが、不慮の事故などで亡くなつた靈はエネルギー量が多く、寿命や病気で亡くなつた靈はその量が比較的少ない。

また、亡くなつた時の年齢も若い方がエネルギー量が多い。

これは、僕が仕事をしてて実感したことでもある。

つまり、何が言いたいかというと、横間さんはまだ若く、死因も確か事故だったはずなので、まだ地上にいるはずなのだ。

僕のような「同業者」に多量の魂を渡していない限りは、だけれど。

ちなみに僕は「同業者」は師匠しか知らない。

「杉原さん、横間さんを見たんですね？」

「ああ……」

見た。だから、ここに来たんだ。

彼はそう言って、ふと、気がついたように固まる。

「仕事……無断欠勤だった」

杉原さんは、そう呟くが早いが、徐々に顔色を失っていく。  
ちょっとすまない、と僕に断つて、彼は携帯電話を手に取り走つて店を出て行つた。

サラリーマンは大変だなあ、と、僕は今日の2件の配達を思い出す。

僕の配達は、別に今でなくとも、今日中に持つていけばいい話なので、あせつたりすることは無い。

窓の外を見ると、杉原さんは携帯片手にへこくこと頭を下げていた。

電話の相手にはその動きは見えないのに、謝罪するときの反射的な運動なのか、しきりに頭を下げる。

ようやく電話が終わつたようで、もう一度店に入つてきただは心なしか顔がげつそりとなつっていた。

「……サラリーマンは大変ですね

「全くだよ」

僕の本心からのねぎらいに、彼は大きくため息を吐く。

体調不良ということにしたのだろうか、会社に何と言ひ訳をしたのかは知らないが、あまりのその様子に、僕は思わず苦笑いを浮かべてしまつた。

「それで……何の話だつたかな？」

彼はさつきの電話を忘れようとしているかの」とく頭を振り、僕のほうを見てたずねてきた。

「横間さんを見たのは本当か、という話です

「ああ……さつきも言つたけれど、本当だよ」

ふむ、と考え込む僕に、杉原さんは露骨に不安そうな顔になる。  
その不安そうな顔のまま僕に投げかけられた疑問は、僕の予想したとおりのものだった。

「……死んだ人間が見えるのって、珍しいことなのか？」

「いえ、そんなことはありません」

だから、僕は僕の知っている限り本当のことを口にする。

「僕みたいに見える体質もいますからね。見えること自体は珍しくありません」

「だが……僕は今までそういう類のものは見たことが無かつたんだ」

つまり、所謂「靈感」は持ち合わせていないといいたいんだろう。世の中にそんな感覚を持ち合わせている人間は、ほとんどいないんだから当然だ。

「死んだ人間は、意思とエネルギーの塊なんです。

横間さんは杉原さんことを常に考えているから、その意思が横間さんの存在を濃くしただけです」

「わかったような、わからないような……」

僕の説明では不十分だつたらしく、彼は首をかしげた。

まあ、杉原さんと横間さんは恋人同士ですから、見えたつて何にもおかしいことはありません、と付け足すと、彼は小さくうなづいていた。

「会つて話す……のが無理なら、伝言だけでも頼めないか」  
杉原さんは一口「一ヒーを飲んでからそう提案してきた。  
僕は渋い顔をしながら告げる。

「……ここ数日、横間さん店に来てないんで、伝言もいつになるか  
わかりませんよ？」

「……」

杉原さんは悩ましげに頭を搔いた。どうしたものかと唸る。

「杉原さん、彼女に会つて何を話すんですか？」

そんな彼を見て、僕はふと疑問に思ったことをそのままたずねた。  
顔を上げた杉原さんは、そのまま自分の鞄に視線をもつていく。  
そこから視線をはずすことなく、彼は僕の問い合わせに対する答えを口  
にした。

「あの手紙の意味を知りたいんだ」

「意味？」

何か意味深なことを書いたどうつか。と、今度は僕が悩む番だつ  
た。

先日書いた二通目の手紙を思い返し、

「ああ」

合点がいってうなづく。

「一度と私を思い出さないでください」

そして、彼もうなずいた。

僕はこの商売をする上で、手紙の内容に一切口を出さない」とを  
自分でルールとしている。

本人の意思を告げてこそこの仕事なのだ。

僕が手紙の内容に口を出して「そんなこと書くのは止めろ」なん  
てこうことはしないし、ましてや内容の改ざんなどもっての外だ。

それゆえ、考へても無駄なので内容のことは考へずと言われたことだけを書くようにしている。

だから、おかしなことを書いているつもりはひとつも無かつたのだけれど。

確かに、言われてみれば無茶なことを要求している文だ。

そして、そういえばと思い出す。

「あの時、手紙出したかつて聞いてきたのは、さすがに無茶な要求だと気づいたからか……」

「ん? 何の話だ?」

僕の呟きが聞こえたらしく、杉原さんは身を乗り出して尋ねてきた。

正直に答えると、彼はまた小さく唸る。

「だつたら、何で最初からこんな文を書いひと……?」

横間さん本人にしかわからないその答えだけれど、彼は答えを探さずにはいられないようで、眉間にしわを寄せて考え込んだ。

僕はすっかり氷の溶けたココアを一口飲む。少しだけ薄められたココアは、思いの外まろい。

自分の世界に入り込んでしまった杉原さん越しに窓ガラスの外をぼんやりと見た。

とにかく、彼の用件は僕にはどうじよつも無いことだ。昼時には彼もあきらめて仕事に行くだろう。

配達は昼からになってしまって、急ぎの配達ではないから問題ない。

一人計画を立て、相変わらず眉間に深いしわを刻んでいる杉原さんを眺めた。

諦めが悪い人だな。

そんな失礼なことを考へて、無表情に彼を見つめる。

「とにかく、理穂が見つかれば……」

僕のその様子に気づくことなく、彼がそう呟いて頭を抱えたときだつた。

「……あ」

彼越しに見た、その「透けた」人影は、

「横間さん」

僕の眩きに、彼はものすごいスピードで立ち上がった。

「本当に見たんだな！」

「今も見えてますよ」

僕が彼女を見失う前に慌てて勘定を終わらせた杉原さんは、店を出るなりそう叫んだ。

人ごみにまぎれて何度か見失いそうになるが、彼女の姿はまだ捉え続けている。

と言つても、靈は人をすり抜け壁をすり抜けどこへでも行くので、いつ姿が見えなくなつてしまつてもおかしくは無い。

「追うぞ！理穂の進むほうを教えてくれ！」

有無を言わせぬ口調で僕の腕をつかむ彼にぎょっとし、しかしそれに気づかない彼はそのまま走る。

僕は横間さんを見失わないことと、つかまれた自分の「腕」に意識を集中させるという、非常に疲れることをやりながら彼に引きずられるように走った。

杉原さんはどうやら彼女の姿が見えていないらしく、僕が「右

「左」と言う声を頼りに人を搔き分け進む。

彼女は重々しいため息を時折つきながら、徐々に暗い路地のほうへと入つていった。

それに伴つて、僕らの周囲に「生きている」人間が徐々に少なる。かといって、「死んだ」人間の数が上昇するわけではないが、何が言いたいかというと、人ごみから抜け出した、ということだ。

横間さんは、僕らのことに気づいているのだろうか？

ふと疑問に思う。

僕らに気づいてどこかに誘導しようとしているのか、それとも、まだ気づいていないのか。

どちらのかはわからないが、杉原さんががむしゃらに走るので、僕はそれに従うしかない。

いい加減息が切れてきた。普段運動なんて配達に行くときぐらいいんだから、当たり前と言えばそうだけじ。

そろそろ止まってくれないか。

「理穂……！」

その願いが通じたのかはわからないが、杉原さんは大声で彼女の名前を呼び、そして横間さんは驚いたように振り返った。

どうやら彼女は僕らに気づいていなかつたらしい。

汗をぬぐう杉原さんと、肩で息をする僕を、目を見開いて見つめている。

「理穂……そこにいるのか？」

杉原さんには姿が見えない「彼女」に呼びかける。

呼びかけられた横間さんは、驚きで声も出ない、と言つた様子だらうつか。

『何で……太一が……』

よつやく発された声は、震えていた。

何で

彼女は目を見開いてか細い声でそう呟いた。

横間さんが止まつたことにより、僕が立ち止まり、それに伴つて

「うー、里恵が向こに来た

おい、理科は何が反応して、くれて、いるのか？

林原さんは僕の勝を放しながら僕は聞いかけられた。僕は一矢の勝を放つ

「同じで、沙羅がここにいるのか、さすがに

僕がそう言つと、彼は思い切り眉を寄せる

横間さんが少しだけ怯んだように身を震えさせた。

「何でって、あの手紙のことを聞きに来たに決まってるだろ！」

111

従は僕の

「細工の世界」

『……言葉のとおりです』

驚きに目を開いていた彼女たったか少し落ち着いたのが返

卷之三

横間さんの言葉を僕が通訳すると、彼は睨みつけるように田の前の彼女を見る（尤も、彼には横間さんの姿は見えていないだろうけ

「アーリー・リリース」等の二つの開拓ノミ

また沈黙した彼女を、僕は無表情で見ていた。

それに気づいたのか、横間さんは杉原さんの質問に答える「」とな

く僕に尋ねる。

『ねえ、郵便屋さん』

「何ですか？」

『何で、太一に私の居場所を教えたの？』

それは僕を非難するような声色で、しかしだからといって怯むわけでもなく僕は淡々と答えた。

「ほぼ連れ去られたに近いですかね。

店の前の大通りでわめいていらっしゃったので、仕方なく話を聞いてみたらこうなりました。

横間さんを見つけられたのも偶然ですよ。僕には人を探知する力なんてありませんから。

アイスココアおごってもらいましたし、その分ぐらいは働きます」氷が溶けてしまって途中からは飲めたものじやなかつたけれど。僕がそう答えると、横間さんは『そつ……』と言つて黙り込んでしまつた。

そこに、せつままで空氣と化していた杉原さんのどすの聞いた声が入つてくる。

「で、俺の質問に答えてくれ」

横間さんはうつむいたまましゃべらず、僕は口出しせず、じばらぐの間誰も何も言わなかつた。

『……だつて、太一、泣いたじやない』

ぽつり、と呟かれた言葉が僕の耳に届く。

僕がすぐに杉原さんにその言葉を伝えると、彼は驚いたように田を見開いた。

『手紙読んで、泣いてたじやない。それ見て、手紙出したことすぐ後悔した。

でも、一度出しちゃった手紙はもう無かつたことにはできないし、また書くよって書いてちゃったし、郵便屋さんにも出すのを止める方が裏切りだつて言われちゃつたし……だから、もう一度手紙を書い

た』

そういうえば、そんなことを言つたかもしれない。

やっぱりおせつかいが過ぎたかな、と僕は少しだけ後悔した。

僕が杉原さんに「通訳」しながら、横間さんの独白は続く。

『でも、郵便屋さんに内容しゃべつてたら、やっぱり、自分は死んだんだって、思えた。

もうあの事故から太一が仕事に復帰するぐらいに日ひちは経つてゐるにね。

そう思つたら、私が書く手紙は、太一を縛り付けてるだけなんじやないかと思つて……。

そんなのいやだった。

この手紙が貴方を縛り付けるものになつてしまつぐらいなら、その手紙で貴方を解放したかった』

彼女はそう言つて、再びうつむいた。

正直、僕は彼女の考えを愚かだと思つた。

一度と思い出すな、なんて無理なこと「まだ好きな相手」から言われたら、それは余計に杉原さんが横間さんを忘れない鎖になつてしまつだらうに。

そこまで考えて、僕は独りああと命懸がいつた。

それに気づいたから手紙を出すのを止めようとしたのか。

そういうなづきながら、僕が杉原さんにその話を伝えようとしたとき、

『何でお前はいつもいつもそなんだ!』

彼は、大声で怒鳴つた。

『え?』

彼女が思わずと言つた様子で聞き返す。

杉原さんはそのままの勢いで怒鳴り続けた。

『いつもいつも、自己完結して、勝手に決め付けて。

僕のためを思つてくれていたのかも知れないけれどな、そんなの

逆効果なんだよ！』

その言葉に、横間さんも黙つてはいな。

杉原さんに負けない大声で彼に怒鳴つた。

『わかつてゐるわよ！

余計に太一を苦しめるだけだつて氣づいたから、手紙を出すのを止めようとしたんじゃない！

氣づいたのが遅すぎて手遅れだつたけれど…』

「ああ、そうだね！いつも氣づくのが遅すぎるんだよ！理穂は！どう責任取つてくれるつもりだ！」

『だから、どうしようかって考えてたら、貴方が私を追いかけてきたんでしょう！』

僕は一人の「喧嘩」を聞きながら、居心地の悪さを感じている。杉原さん、僕なしで普通に横間さんと会話できているし。見たところ、姿も見えていいようだし。

あれか、師匠が言つていた「近しい者通しは波長が合いやすいから靈の姿を確認しやすい」つてやつか。

完全に邪魔者となつた僕は、とりあえず3歩下がつてその様子を眺めた。

「大体何を勘違いしているのか知らないけれどな、僕が泣いたのは手紙がうれしかつたからだ！」

2週間前に死んだお前から手紙が来て、死んでも僕のこと心配してくれていて、やっぱりお前はお前なんだと思えて、うれしかつたから泣いたんだ！』

『でも、その手紙が私を忘れられなくしてるんじや』

杉原さんの言葉に、目に見えて横間さんの声に勢いが無くなる。だが、逆に杉原さんの声の勢いは増すばかりだ。

『まだお前が死んでから2週間しか経つていないんだ！

そんなすぐに好きな女忘れるほど、僕は薄情じやない！』

『太一……』

「これから先、もしかしたら僕はまた誰かを好きになるかもしけな

い。

でも、だからと云ひて、君を忘れることができないし、君と過ごした日は決して無くならな」

『……ありがとう、太一』

横間さんの目から涙が零れ落ちる。

彼は、それを見て苦しそうに声を発した。

「だから、一度思い出すな、なんて言わないでくれ

『ごめんなさい』

完全に僕のことなんて忘れ去った彼らは、お互いに触れることがないと言つのに、お互いを求めるように手を伸ばす。

僕は彼らに気づかれることなく1歩2歩と後ずさり、その場を立ち去ることに成功した。

無事、今日の配達を終えた僕はいつもの数十倍の疲れを感じながら店の鍵を開けた。

静まり返った部屋に入り、僕は倒れこむように畳に寝転がる。手元にあつた布団を手繰り寄せて頭からかぶり、今日はもう仕事をしたくなくてため息をついた。

肉体的に疲れた。それ以上に精神的に疲れた。

自分の普段の走るスピードよりもかなり早い早さで走りまわされ、おまけに腕をつかまれて「意識的」に「無意識」を封じ込めることになってしまった。

こんな思いをしたのは、久々だ。

そして、一度とこんな思いをするのは「ごめん」だった。

「……恋人ねえ」

全く、人騒がせな代物だな、と改めてため息をつく。

横間さんは、また手紙を書きに来るのだろうか？あの体の透け具合からして、もうあまり地上にいられそうでは無かつたけれど。

死から2週間、いや、もうすぐ3週間か。それで、手紙も2通出した。

魂はずいぶん消費されているはずだ。

「ま、僕には関係ないけれど」

静かな部屋で一人そう呟いてから、僕は目を閉じて久しぶりに感じる睡魔に身をゆだねた。

『あの……』

「……いらっしゃい

どれくらい眠っていたのだろうか。

女性の声に目を覚ますと、辺りはもう暗闇に包まれていて、自分

がよつほど疲れていたことを自覚した。

苦笑しながら、田の前にいる横間さんと田をやると、彼女は恥ずかしそうにうつむいている。

『昼間はすみませんでした』

僕が声をかける前に彼女はそつと、深々と頭を下げた。  
「別に、気にしていませんよ」

いつものような平坦な声で答える。

半分鹽。半分本當。

横間さんと杉原さんのおかげで睡魔に見舞われるほど疲れきつてしまつたが、一眠りしたらどうでも良くなつていた。

思いの外単純な自分の性格にもう一度苦笑してから、「手紙ですか?」と尋ねる。

彼女は静かに首を横に振つた。

『手紙は、もういいんです。

彼と直接しゃべつて、言いたいことも言つたし、聞きたいことも聞けました。

ただ、郵便屋さんに謝罪と挨拶がしたくて』

やつぱり、彼女は律儀な性格だつたようだ。

もう一度下げられた頭を見て、僕は頭を上げるよつ頼む。

「本当に、気にしていませんから。

それに、そろそろ時間なら杉原さんと一緒に居たほうがいいのでは?』

僕の言葉に、彼女は弱弱しく笑つて『挨拶、の意味もわかつてらつしやるんですね』と言つた。

『彼にはもう、最後の挨拶をしてきました。どうしても、郵便屋さんにお詫びをしたかったので。

それと、2通でしたけれど、彼に手紙を書いて、届けてくださいました

『……いえ』

お礼を言われ慣れていない僕は、どうしたものかと頭をかく。

最後の挨拶だ、と言つてやつてくる依頼人は、居なかつたわけではない。

それでも「ありがとう」なんて真正面から言われたのは久しぶりで、どうしたらしいのかわからなかつた。

がらにも無く狼狽していの僕に、横間さんはクスリと笑つて、『それでは』ともう一度頭を下げ、消えた。

誰も居なくなつた部屋の中で、僕は小さく、微笑んだ。

「……何やつてるんですか？」

翌日再び配達に行こうと店を出たら、また、杉原さんが狭いビルとビルの隙間に杉原さんが挟まりかけていた。

「いや、昨日はすまなかつた」

「……いえ

僕がそれに気づいて近寄ると、彼は横間さんと同じようになど々と頭を下げる。

「でも、君のおかげで理穂ともつ一度話ができた。本当に感謝している」

「……偶然ですか？」

正直、照れくさくて少しだけ居心地が悪い。

この人たちは一人そろつてすごく律儀だ。

礼をさせてくれと言う彼の言葉を丁重に拒否して、僕は「配達があるから」と歩き出す。

杉原さんはスース姿だ。今日が何曜日かは完全に曜日感覚の無くなつた僕にはわからないけれど、きっと仕事なのだろう。

遅刻しますよ、とだけ余計なお世話を付け加えて、僕はもう杉原さんのほうを見るのを止めた。

そんな僕に、杉原さんは叫ぶ。

「……僕は、絶対理穂のことを忘れない！」

人の記憶力は絶対じゃない。

絶対忘れないなんて、不可能なことを宣言するのはやめておべきだ。

いつもなら、そう考えて自嘲気味に笑ってしまうところだが、僕は決して杉原さんを振り返ることなく、かといっていつものような不快感は一切感じなかつた。

## 郵便屋の仕事（10）（後書き）

郵便屋の仕事編はこれで終了です。

誤字脱字などありましたら、ご指摘お願いします。

## 郵便屋と怨念（一）（前書き）

今日は初めて2話投稿しました。  
誤字脱字などありましたら  
ご指摘お願いします。

## 郵便屋と怨念（1）

今日も僕はいつもおつ仕事に励んだ。  
先ほど聞いた内容を頭の中で思い浮かべ、一字一句違わぬよう手紙を書いていく。

そろそろ、ペンのインクが切れるころか。今度買いに行こう。  
そんなことを考えていると、何かの気配がした。

ものすごいスピードで壁をすり抜け、僕の目の前に立ったのはジ

ヤージ姿の男性。

「いらっしゃい」

『親友を助けてくれ!』

とりあえずいつものとおりそつ声をかけると、彼は開口一番にそう叫んだ。

僕は郵便屋。

仕事は手紙を代筆して、それを配達するとこり、単純明快な内容となつていて。

ただし、客は「死んだ」人間……つまり、靈だが。

代償として金、物品、あるいは魂を受け取ることでこの商売を成り立たせている。

つまり、僕の仕事に人助けは入っていない訳で、僕は目の前の男の言葉に首をかしげた。

「ここは郵便屋です」

『知つてゐる!』

彼は焦ったように詰め寄つてきたので、僕は思わずのけぞる。

「……とりあえず、落ち着いてくだ」

『親友に、呪いがかけられたんだよー』

「……はあ?」

何を言ひ出すんだ、こいつ。

僕は田の前の男を眉を寄せて凝視する。

『とにかく、助けてくれ！

あんた、靈が見えるんだろ？怨念が見えるんだろ？！助けてくれよー。』

それに気づかない男はまくし立てるが、僕は眉間にしわを濃くしただけだった。

「中条亘さん……どう、よろしかつたですか？」

『ああ』

とりあえず、興奮状態の彼を落ち着かせて、身元を確認した。さつき、彼がまくし立てた言葉を整理して状況を把握するためにたずねる。

「で、親友の藤崎裕一さんが呪われた……つまり、怨念に当たられた、ということですよ？」

『ああ。だから助けてくれ！』

彼は、一応興奮状態からは戻ってきたようだが、まだ焦ったようにたびたび僕を急かしてきた。

僕は相変わらず眉間にしわを寄せたまま、はつきりと言いつ切る。

「管轄外なのですが

『は？』

中条さんは、僕の言葉の意味がわからなこと言つたように、怪訝な顔をした。

「だから、僕は郵便屋であつて、他人の怨念を消すことは業務内容に含まれません」

その言葉を僕が発した途端、彼は田を見開いて、僕に詰め寄ってきた。

『業務内容つて……人が呪われてんだぞ！何で助けてやらねえんだよー。』

あいつ、すっげえ苦しんでるのに！』

生きた人間だったら、つばが飛んできそな勢いで中条さんは怒

鳴る。

耳元で大声を出され、僕は反射的に後ろに身を引き、そのまま表情で不快感を露にした。

「何で、人助けしなくちゃ いけないんですか？」

『何でつて……』

助けられる力があるなら、助けてやるのが当たり前だろう。彼は、僕の質問に、全く答えになつていない答えを返してきた。少しいらいらしながら、でもその様子は微塵も見せることなく僕は再び尋ねる。

「何で、助けられる力がある人間は助けるのが当たり前なのでですか？」

『……何が言いたい』

「言葉の通りです」

中条さんは睨むように僕を見た。

『最低だな』

そして、彼は蔑むようにそう言った。

相変わらず深くフードをかぶり、目元が見えないために僕の表情はほぼつかめないが、今の僕は目が見えていたとしても、きっと誰にもつかめない表情をしていただろう。

鏡で見たわけでないから絶対とは言い切れないが、きっと今の僕の顔はこれ以上ない無表情だ。

「……じゃあ、お尋ねしますが、貴方のご友人は何故、呪われたのですか？」

『え？』

僕は静かに問いかける。

「まるで、中条さんの言い草は、呪いをかけた方が一方的に悪く、呪われた方は何も悪くないみたいじゃないですか。」

他者に向けられた念に当てられた、と言つことなら話は別ですが、貴方の慌てぶりを見るとどうやらかなり藤崎さんが苦しんでいらっしゃるようなので、本人に向けられた怨念なのでしょう。

だつたら、そこまでの怨念をぶつけられた、貴方のご友人には何の非もないのですか？」

『……』

中条さんは黙り込んだ。

きっと、親友のことを心配した故のその言い草なのだろうが、あまりにも一方的過ぎる。

「藤崎さんに怨念をぶつけた靈だつて人間です。貴方や私、それに藤崎さんと同じ。」

怨念なんていうのは、ただの負の感情の塊です。

そこまで負の感情を集めた靈が悪いと、おっしゃるのですか？」

僕の声は、静かに部屋に響く。

彼は、小さく『悪かった。邪魔したな』と言つて消えた。

靈だつて「人間」だ。

悲しみもするし、怒るし、恨む。

その感情が少し大きくなりすぎてしまつたのが「怨念」だ。だから、他人の感情を勝手に無下にすることなどできない。尤も、僕は自分勝手な人間だから、その被害が自分に及びそうだつたら容赦なく霧散させるけど。

「はは……人のこと、言えないな」

自嘲気味に自分の笑い声に、またいいらしてしまつ自分は、本当にどうしようも無いと思う。

## 郵便屋と怨念（2）

「……」

『頼むよ』

いつまで、この何の意味ももたないやり取りを繰り返せばいいのだろうか。

そろそろ頭が痛くなってきた。

「だから、管轄外だと」

『そこを何とか！他に頼める伝なんて知らねえんだよ！代償も支払うから！』

僕の目の前に居るのは、先日僕が怒らせてもう一度と来ないだろうと思われていた中条さん。

今日で3日連続僕のところに頼みに来ている。

「……」

『このとおりだ！』

彼は両手を合わせて「合掌」し、僕に頭を下げ続けた。

『昨日はすまなかつた！』

「……は？」

中条さんが怒つて出て行つた翌日、彼は配達に出かけようとしていた僕の前に突然現れ、そう言って深々と頭を下げた。

一度と顔を合わせることはないと思っていた僕は、驚いて目を丸くした。

『昨日の俺はどうかしていた！

いくら裕一が心配だからといって、言つていい」とと悪いことがあつたはずだ。

社会人として恥ずかしい。許してくれ！』

「……いや、別に気にしていませんけど」

どうやら中条さんは、根はあのような横暴な人ではないらしい。

時間が経つて、落ち着いたようだ。

僕は、少しだけ安心して配達に出ようとした。

「……何してるんですか？」

僕でない人なら、何も氣にすることなく彼を「通り抜け」て前に進むことができただろう。

だが、僕はそんな風にできないので、反射的に立ち止まつた。

『昨日の俺の言い分は間違つていた。だが、裕一を助けてやつてほしいのは本心だ。

頼む。あいつを助けてやつてくれ！』

そう言つてドアの前に立つ中条さんを見て、僕はあきれたように眉を寄せた。

「昨日も申し上げましたが、管轄外です」

いくらそう言つても、彼はドアの前から動く気配がない。

困り果てた僕は、フード」と頭をかいて「……どいてください」と呟いた。

『あんたがYESTとこつまで、俺は立ち退かねえ！』

「……はあ？」

なんという営業妨害だ。

僕はどうしたものかと彼を見る。

中条さんの目は決意に満ちていて、やつてやつしそうもなく僕はまた頭をかいた。

結局、その日は「営業妨害だ」という僕の言葉に中条さんが折れ、彼が出て行つたものの、それから連日やつてくるよつこなつた彼に、僕は正直心底頭を抱えていた。

『大体、郵便屋が呪いを解いたらいけねえなんて決まりはないだろ』  
『だから、呪いだつて感情の塊なんです。不用意に消すことはできません』

『だからつて、苦しんでるやつを見逃していい理由にはならないだ

『……』

「じゃあ、呪いをかけた本人は苦しんでいないとでも？」

『だからこそ、双方が苦しんでいるんだからさつさと呪いを解消して裕二も、呪ったほうも苦しみから解放されねえとダメだろ』

「誰が苦しんでいようが僕には関係ありません」

『そこをなんとか！』

「……」

師匠、こういう密のあしらい方は聞いていません……。

思わず思い出したくないはずの師匠に心の中で呼びかけてしまつほど、僕は困っていた。

『頼む！』

彼が再び勢いよく頭を下げたとき、

『あの、すみません……』

どこの高校の制服を身にまとつた女子の靈が、扉をすり抜けて来店した。

『いらっしゃい』

僕は内心ほっとしながら、中条さんを無視してそちらに視線を向ける。

他の客の迷惑だ、とばかりに手をひらひらとふると、彼は少しつとんだが、おとなしく店を出て行つた。

『手紙の代筆ですか？』

つむきいのが居なくなつて、いつもよりも少しだけ上機嫌に問いかける。

と、田の前の彼女は少しだけ不安そうに質問し返してきた。

『あの、郵便屋さん、ですよね？』

ああ、この見た目だから、僕が郵便屋に見えなかつたのだひつ。良くあることなので、僕は平坦な口調で返答した。

『はい。郵便屋です』

うなずいた僕を見て彼女は、いつかの誰かのよう、僕の田の前まで身を乗り出す。

『兄を……藤崎裕一を助けてほしいんです!』

……。

なんだか、聞いたことのある台詞。

激しくめまいがしたような気がした。

「……で、藤崎裕一さんの妹の藤崎薰さんで、ようしかったですか？」

『はい』

とりあえず名前を聞き、彼女がうなずいたことを確認して、その隣にいる中条さんに顔を向ける。

彼は薰さんの来店により、いつたん外に出たが、『ひょっとして薰ちゃん?』と叫びながら例の『』とく全速力で再来店したのだ。

「……中条さん、面識あります?」

『いや、裕一から写真を見せられたことはあるが、直接会つのは今日が初めてだ』

彼はそう言って『写真よりも実物のほうが可愛いな』と、彼女に微笑みかける。

薰さんは、微笑を浮かべてその言葉をかわしていた。

「その裕一さんて人、これだけ心配してもらえる人間なのに、何で呪いなんてかけられたんだ……」

僕は独り言を呟いて、大きくため息をつく。

『乗り気になつてくれたか?』

田をらんらんと輝かせる中条さんに、僕はもう一度大きくため息をついた。

## 郵便屋と怨念（3）

「……どうしてこうなった」  
僕の呟きは、誰にも聞き取られることなく街中の騒音に消え去った。

『おーい、郵便屋、もつと早く歩けねえの?』

大きくため息をつく僕の前を中条さんが歩き……否、浮遊し、僕の隣で薫さんが『ありがとうございます』と未だに頭を下げ続けていた。

この人ごみの中なので、僕は中条さんに話しかけることはせず、思い切りにらみつけた。

『ああ、そつか。

生きているときは物すり抜けるなんて無理だつたんな』  
だが、僕は目が隠れた容姿のため、彼は僕の鋭い視線に気づくことなくあっけからんと笑う。

死んでからまだ5日しか経っていないのに、案外生きているときの感覚つて忘れるんだな、と言いながらさらに笑みを深くした。  
『ちょっと、中条さん……。

郵便屋さんには無理言つてお願いしているんだから

その彼をとがめるように、薫さんが小さな声でそういうが、中条さんが聞く耳を持つとは到底思えないし、実際彼は手をひらひらとふつただけだった。

『はあ……』

僕は大きくため息をつく。

そういう薫さんも、さつきは酷い手使つてくれたじゃないか。  
思い出して、またため息が出た。

結局、一人の『頼む』『お願ひします』といつ言葉にうなずいて

しまつ形になってしまった。

最初は人数が増えたところで、とずつと拒否していたのだが、そうしているうちに薫さんの目尻に涙がたまり始め、『女の子泣かせる気が!』と中条さんに言われ、気がついたら、

「わかりました! とりあえず見に行くだけですからね! -怨念を取り扱えるかなんて、わかりませんからね! -」

と、叫んでしまっていた。

ガラにもなく大声を出していることと、台詞の中身が大問題だと言つことに気づいたときにはもう遅く、『本当にですか!』と途端に涙を引つ込めて花が咲いたように笑った薫さんを見て、僕は女性の恐ろしさ、と言うものを知つた気がした。

『よししゃ、郵便屋が意見を翻す前に行くぞ!』

中条さんがそう宣言すると立ち上がり、『ほら、立て!』と僕を促す。

仕方なく立ち上がり、「配達中」の札をかけて一人の靈を遠ざけてから鍵をかけた。

「で、ここが裕一さんのアパートですか?」

『ああ、ここだ』

中条さんに確認を取つてから、一人暮らしをするにはちょうどよさそうで、かといって「ぼろアパート」ではない一般的な建物の前に立つ。

「……」

僕は、そのアパートを見上げた瞬間眉をひそめていた。

『……やばいだろ』

さつきまでからからと笑つていた彼は、下唇をかみ締める。薫さんも、何も言わなかつた。

「……近年まれに見る、と言うか」

そのアパートの5階部分にだけ、大量の靈が引っ付いている。おそらく、「怨念を溜め込んでいる最中」の靈が引き寄せられて集ま

つてきたのだろ？。

普通の靈に害はない。ただし、怨念を溜め込んだ靈は例外だ。生きている人間に害を加えることができ、その上怨念を溜め込んだもの同士で惹かれあいやすい。

そして、「怨念持ち」の靈には生半可な覚悟でなれるものではない。

僕はその光景に眉を寄せた。

これは中条さんと薰さんにはさつと見えていないのだろ？が、「怨念が、黒い霧みたいだ」

その靈たちを取り囲むように、快晴の空とは正反対の、真っ黒い霧のようなものが立ち込めていた。

「……単独の怨念じや、ここまでにはならないだろ？」

さつと、もともと彼に怨念を「ぶつけた」あるいは「乗せた」靈は複数。

とはいっても、10人もいないと思うが。

その怨念に引き寄せられた大量の靈が溜め込んでいる怨念が相乘し、さらに怨念が濃くなっているようだ。

『お兄ちゃん……』

兄の身を案じる薰さんの言葉は、少しだけ涙ぐんでいた。中条さんは、黙り込んで何も言葉を発しない。

「……ん？」

そんな中で僕は他の靈と違い、地面にたたずむ靈を見た。

僕らの500メートルぐらい先にたたずむ、独りの女性の靈。彼女はぶつぶつと何かを呴きながら、アパートをじつと見つめ、しばらくするごとに消えた。

どこかで会つたことがある気がする。僕は首をかしげ、思い当たつた言葉をそのまま呴いた。

「……あのときの電車の？」

その呴きに、返つてくる言葉はなかつた。

が、僕の脳裏には、はつきりとあのときの光景が浮かんでいる。

確かに、以前横間さんの手紙を配達しているとき<sup>(1)</sup>、サラリーマンらしき男性に怨念を「乗せ」ていた女性だつたはずだ。

「中条さん」

『なんだ』

僕はアパートに視線を向けたまま中条さんに尋ねる。

「裕一さんつて、眼鏡かけてるんですか?」

『ああ』

「電車で出勤してました?」

『……そうだけど』

「その電車の中で、毎朝新聞読んだりしてませんでした?」

そこまで質問して、ようやく一人の視線がこちらに向いていることに気づいた。

「多分、裕一さん見かけたことあると思つんですね」

『……え?』

二人の驚く顔が視界に入る。

僕は無表情のまま彼らに視線を向けた。

## 新便箋と怨念（4）（前書き）

遅くなりました。  
申し訳ありません。

## 郵便屋と怨念（4）

「以前の配達で電車に乗つてゐるとき」、怨念乗せられかけてる男性を見たことがあるんですねけど、多分裕一さんだと思つんですね」もつ一度アパートに視線を戻しながらそういふと、二人は少しだけ困つたような表情を浮かべた。

が、口を開こうとはしなかつたので、僕は先を続ける。

「一番初めに見たときは僕や他の乗客にも被害がありそうだったから怨念霧散したんですけど、一回目はなもせつだつたから放つておいたんですね。

まさか、ここまでなるとは想定外もいいところですけど」

まあ、本当に同一人物かどうかは会つてみないとわかりませんけど、と付け足してアパートに向かつて歩き出すと、

『裕一を、助けてくれるのか?』

中条さんは今更そんなことを言い出した。

さつきまで半分無理やりに連れてきておいて、と僕は少しあきれたが、小さくうなづく。

「……これは、下手をすると裕一さんだけの被害に留まりそうにありますからね」

群がつてゐる靈の数からして、この状況は異常だ。郵便屋の仕事の枠は超えているが、仕方あるまい。

これは「僕個人」も被害にあつてもおかしくない状況だ。自身に被害が行く前に片付ける必要がある。

「とにかく行きましょう。部屋はどこですか?」

僕が尋ねると、中条さんが『着いて来い』と言つて、進み始めた。

アパートの5階の廊下は、真つ黒い霧が立ち込めてゐるようだつた。

まだ昼間で、明るいはずなのに、四方八方を怨念持ちの靈が囮んでいるからだ。

「……これはやばいな」

僕はポツリと咳いて眉をひそめた。額に脂汗がにじむ。普通の人間なら、すぐに怨念に当たられてくたばってしまうだろう。

ここに来て初めて僕は裕一さんの心配をした。

『鍵はそこの裏に置いてあります』

「了解しました」

薰さんの言葉に、扉をすり抜けることのできない僕はうなずいて鍵を拾う。

鍵穴にそれを差し込んで回すと、かちちゃんと軽い音を出して鍵が開いた。

僕は無遠慮にドアを開けて中に入る。インターホンなんて押すわけがない。

「失礼しまーす」

『……』

軽い調子で靴を脱ぎながらそう言つた僕を見て、中条さんは無言でいつそう眉をひそめる。

正直言つて、この部屋に入りたくない。だが入らなければならない。

だから、顎を垂れた玉のような汗を振り払つよう、あえて軽い調子でそういった。

何故なら廊下の霧とは比べ物にならないからだ。そこには良くぞここまでと言いたくなるぐらいの「怨念」が立ち込めてい。

「裕一さん、どこにいらっしゃいますか……あ

『お兄ちゃん!』

僕の軽い声とは対照的に、薰さんの声はまるで悲鳴のようだった。だが、彼女の声は彼には届かない。

『……やばいな』

床に寝転がる、否、倒れている彼の、頬はこけ、顔色は白をとつに通り越して青く、目は苦しげに閉じられていた。

僕の声すら届いていないのかもしない。

裕一さんは不法侵入である僕の声にも何の反応も示すことなく、時折小さなうめき声をもらすだけだった。

とりあえず、裕一さんをベッドまで運ぶため僕は全意識を両腕に集中させて彼を引きずった。

これ以上エネルギーがなくなつたら、本当に死んでしまつかもしれないから、特に慎重に。

そしてベッドまで運び終えると、手早く「鍵」をかけた。

これは物理的な鍵ではなく、店のものと似た「内側に居るもの以外を拒む鍵」だ。

『外に居た靈が消えた……』

その様子を見ていた中条さんが啞然とした様子で呟いていたが、今は忙しいから無視。

「これから僕がいいと言つまで、この部屋から出ないでくださいね。この部屋に入れなくなりますから」

必要事項だけ告げて、僕は換気をするべく窓を開けた。

彼に「乗せられた」り、「ぶつけられた」りした怨念は消えることはないが、少しだけでもこの黒い霧のような怨念が霧散されることを期待して、だ。

それだけやつて、一息つくと、薰さんが裕一さんの顔を覗き込んでいるのが見える。

『お兄ちゃん……』

靈の姿はほとんどの場合普通の人には見えないということもあるだろうが、衰弱しきつた彼は、何の反応も示さなかつた。

『……』

僕はその様子を少しだけ眺めてから、彼に近寄つて、影響の出な

い範囲で怨念を霧散させる。

顔色は変わらないが、少しだけ寝息が安定したように思われた。

「やっぱり、僕が電車で見た人と同じ人ですね……」

『……なんで、怨念全部取つ払つてやらないんだ?』

僕の咳きに反応することなく、中条さんがそう問い合わせてきた。

それは、非難と言うより、純粹に「疑問」のようだつた。

「怨念持ちではない中条さんたちにはわからないと思いますが、靈つて自分の怨念に敏感なんですよ。

自分の怨念が全て消されたら、対象に何かあつたと思つて、ここにまたやつてきます。

怨念持ちの靈の力は、計り知れません。僕が対応できる靈かどうかもわからない。

だから、怨念をかけた相手を探つてから出ないと、全ての怨念を霧散させることはできません

僕の答えに、中条さんは何か口を開きかけて、止めた。

## 郵便屋と怨念（5）

『あ、郵便屋さん違いますって！』

「……」

たつた今、僕は薫さんに教えてもらひながら病人食を作っている。もともと自分がほとんど食事をしないため、料理などはからつきしなのだが、裕一さんに何か食べさせる必要があるから仕方がない。久しぶりな鍋や包丁に少しばかり緊張しながらも薫さんに言われるがまま手を動かす。

『水、入れすぎです！』

「……」

見るからに女子高生な彼女は、生前は親を手伝つて家事をよくしていたのだそうだ。

違う違うと僕を怒る薫さんはどちらかと言つと「母」に見えて、僕はこつそり視線をそらした。

母親という存在は、未だに苦手意識がある。

「……これでいいんですか？」

『……まあまあてところですかね』

完成した卵粥に、薫さんは辛口な評価を述べて、裕一さんに付いている中条さんの様子を見に行つた。

その後姿を確認して、僕は怨念によつて引き起こされた頭痛に額を押さえる。

以前に師匠に怨念の中に閉じ込められたときの比ではないが、それでもこの「霧」の中で影響が出ないわけがない。

怨念は普通、生きている人間、つまり肉体のある人間にしか効果がない。

そして、その生きている人間の中で、「怨念をぶつけられた、乗せられた」人間が一番被害を受ける。  
これは当然のことだろつ。

だが、怨念の中に居て、標的の次に被害を受けるのは「怨念を認識できる」人間なのだ。

これもまた師匠の受け売りであり（本当に何でも知っているんだ、あの人は）僕は自分以外の人間が怨念の中に居てどう感じるのかはもちろん知らないが、自分はその一番目に被害を受ける人間であり、実際多大な影響を受けてしまうので、本当なのではないかと思っている。

正直に言つてしまえば、まずこの部屋から出たいし、それが叶わないのならばここに怨念を全て霧散させてしまいたい。

だが、さつき中条さんに説明したとおり、今はどちらも叶わないで、僕は耐えるしかないのだ。

『郵便屋！裕一が気が付いたみたいだ！』

「……今、卵粥持つて行きます」

中条さんのその声に、僕は額から手をはずした。

大丈夫、師匠の特訓じいじゅに今まで耐えてきたじゃないか。

僕は額の脂汗をぬぐって、怨念の「標的」が居るためさうに霧の濃くなつて居る隣の部屋へと移動した。

「お気づきですか？材料は勝手に使用させていただきました。  
あと、緊急事態でしたので不法侵入させていただきました」

「……誰だ」

僕が近づくと、やつれでいるが、しつかりと目を開いたその顔がこちらを見てきた。

どうやら、僕が取り払った分だけは回復しているらしい。

「僕は郵便屋です」

「郵便屋……？」

素つ気無い僕の声と、それを怪訝な顔をしながら聞く裕一さんのやり取りに、中条さんと薰さんが心配そうな表情で僕と彼を見やる。

『なあ、郵便屋……』

そして、これまた心配そうな表情で中条さんが僕に声をかけた。  
それを無視して、僕は裕一さんに話を続ける。

「実は、今ここに中条亘さんと藤崎薫さんがいらっしゃいます」  
彼は、呆然と目を見開いた。周りの一人も、驚いたように目を見開いている。

「……ふざけないでくれ」

裕一さんの声は、掠れてはいたが明確な「怒り」がこもられていて。

「ふざけてなんていませんよ。彼らが居なかつたら、僕はここには来ていませんから。」

アパートの場所も中条さんにお伺いしましたし、鍵の在り処と卵粥の作り方は薫さんに教えていただきました」

だが、それには気づかないフリをして飄々と答える。

「中条さんが亡くなられたのはつい5日前、薫さんも同じくらいでしたね」

「何故そんなことを知っている」

「本人から聞いたからです」

「……」

裕一さんは、思案するように目を閉じた。

僕は、その間に額を伝つ汗をぬぐう。

「……仮に、2人がここに居るとして、何故君はここに来たんだ?」

「2人に貴方を救つてくれと頼まれたからです」

「君は郵便局のアルバイトではないのか?」

「アルバイトではありませんが、僕は一介の郵便屋であることは確かです。」

管轄外だと申し上げたのですが、お2人が聞く耳を持たず、渋々ついてきました

彼は閉じていた目を開けた。

「……今、2人はそこに居るのか

「はい」

裕一さんの質問に、僕はうなずく。

また汗が垂れたので、自然な動作でそれをぬぐつた。

「2人と、話はできないのか？」

「今は、できません。

ですが、2人とも裕一さんは近しい人間ですので、場合によつてはできるかもしれません。

立場や血縁が近い人間ほど、靈は確認しやすいので

淡々と答えてから、2人のほうを振り向く。

裕一さんには見えないが、薰さんの目が潤んでいる。

はて、どうしてだらうか、と僕が首をかしげると、彼女の口から答えが出た。

『お兄ちゃん、話せるぐらい元気になつてよかつた』

そう言つて涙を流す薰さんに、居心地の悪さを感じたのはじつやら僕だけではなかつたようで、中条さんが頭を搔きながら僕に促す。

『……郵便屋、粥が冷めるから、早く食べさせてやれ』

「あ、すみません」

僕は裕一さんに「起きありますか」と確認を取つてから体を起こすのを手伝い、机の上の卵粥を差し出した。

「……」

店の鍵を開けて中に入ると、なんだかとてつもない疲労感に襲われ、ドアにもたれかかってそのまま座り込んでしまった。額の汗をもう一度ぬぐい、ふうと大きく息を吐き出す。

「……なんなんだ、あれ」

僕はポツリと独り言を呟いて、はいつくばつたまま畳へと移動した。

頭痛は引かないし、体はだるいし、こんなに疲労したのはいつ以来だろうか。

中条さんと薫さんは、あのまま裕一さんの家に居ることにしたらしく、僕は一人で帰ってきた。

結局「鍵」の応用したものは、かけたままにしていったので、あれ以上に靈がよつてくることはないだろうが、それで彼に乗せられ、ぶつけられた「怨念」が消えるわけではない。

ただ、その怨念の主以外からの干渉はなくなる。それだけだ。それだけでも、彼からしたら大きな変化かもしれないが、原因不明の体調不良はまだ残っている。

それは僕にも言えたことだった。

「……あー、畜生」

怨念をぶつけられた張本人以外でその影響を受けた人は、大体時間が経つとその頭痛や疲労感は消える。

もちろん生活環境によつてはその体調不良が長引く人もいるが、普通に3食食べ、しっかりと睡眠を取ればすぐに治る代物だ。

だが、生憎と僕は「普通」の生活を送つていない。

食事も睡眠もほぼ取らないに等しい。

だったら食べて眠ればいいじゃないか、と言われると、僕はそうできない理由がある。

「……久しぶりに行こうかな」

少しぐらい、何の問題もないんじゃないか。「狩」に行つたつて。ずっと言いつければ守つて行つていなかつたんだし、ほんの少しだしつつになくなつた。

。

そう考へて、僕は思い切り頭を横に振つた。

脳内に現れた師匠にも「あれほど言つたうつ！」と怒鳴られる。

……完全に弱つてるな、僕。

畳の上で大きく伸びをして、自分自身に苦笑した。

「とにかく、あの怨念をどうにかするしかなさそうだな……」

自分自身に言い聞かせるようにそう呟く。

あれだけの怨念が集まつていれば、近隣の住民にも被害は出ているはずだ。

あれ以上集まつたら、大変なことになる。その前に何とかしないと僕にももつと被害が出る。

とりあえず寝ようと布団を手繰り寄せ、まぶたを閉じた。

「こんなにちは

『おー、来たか郵便屋』

疲労感と頭痛を残しながらも午前中に手紙の配達を終え、昼前に裕一さんのアパートに行くと、僕の出迎えをしてくれたのは中条さんだつた。

「何か変わつた様子は？」

自分が入るためにいつたん解いた「鍵」をドアを閉めると同時にかけなおしながら尋ねる。

目の前の彼は肩をすくめて答えた。

『無いな。

郵便屋のおかげで少しばかり裕一の体調は良くなつたし、靈もよつてこなくなつた。

逆に言えば、裕一の体調はあれ以上良くなつてはいないし、怨念

の主の靈もどこにいるかわからねえままだ

「まあ、そうでしょうね」

社交辞令程度に尋ねた質問だったため、僕も中条さんと同じよう  
に肩をすくめた。

彼は苦笑して、その後、苦笑の笑の部分を消し去った表情で、『  
それから』と付け足す。

『俺たちの姿は認識されないままだ。アイツは今も眠つて、薰ち  
ゃんはその横にずっといる』

「……そうですか」

それも、まあそんなものだらう、と思つたが言わなかつた。

靈が確認できるのは、本当に稀なことだ。

だから、大抵の人が死んで靈になつて、生前自分と近しかつた人  
間のそばにずっといるのに、彼らはその姿を認識することはほとん  
ど無い。

けれど、それを言わなかつたのは、中条さんがあまりにも苦々し  
げな表情を浮かべていたからだし、そんなことを云ふたつて何にも  
ならないからだ。

「僕はこれから外を見てこようと思つたんですけど、中条さんも『一  
緒されますか?』

だから、そのまま何も云ふことなく次の動きについて提案をす  
る。

『ああ、ここは薰ちゃんに任せと、俺も行こ』

中条さんは僕の提案にうなづいて、そのままを薰さんに云ふてから  
一緒にアパートを出た。

アパートを出て、とりあえず怨念の「跡」を追うことにした。

怨念は、それを乗せた、あるいはぶつけた靈とその対象者を「跡」  
でつないでいる。つまり、一方の居場所がわかつていれば、その相  
手の居場所も知ることができるのであるわけだ。

僕は靈が見えるだけで靈を探知する力は持ち合わせていないが、怨念を見るることはできるのでその「跡」も見ることができる。

『なあ、郵便屋』

「何ですか？」

地面をじっと見つめて「跡」を探していた僕に、中条さんは唐突に話しかけてきた。

『……なんで、裕一はこんなに呪われてんだろうな』

「……さあ」

それを知りたいのは僕のほうだったが、彼の目があまりにも悲しそうなので、首を傾げただけにしておく。

どうやら、中条さんにも裕一さんがこんなに怨念を浴びる理由がわからないらしく、『アイツは人から恨まれるようなやつじゃない』と呟いた。

「……前にも申し上げましたが、怨念は人の心の塊です。他人の心は誰にもわかりません。

また、どんな行動がいつ誰を傷つけているかなんて、僕たちにはわかりません。

だから、裕一さんがどんなにいい人だとしても、怨念の対象になる理由はあるはずです

僕のその言葉に、中条さんが黙り込む。僕はただ、と続けた。

「ここまで怨念の対象になる人間は滅多にいません。

そして、中条さんから見て、裕一さんは恨まれるような人間じやないのならば、理由は他にあるのかもしれない

「彼が顔を上げ、『理由?』と呟く。

『それは何だ?』

「今から、それを調べに行くんです」

それからしばらく、僕らは2人とも何も言わず、ただ「跡」を追つて歩き出した。

「……」

『話が通じない相手って言つのは、ああいつのことなどを指すのか……』

中条さんの咳きに、僕は無言で縦に首を振つた。

『……まるでまるでストーカーだな』

「まるでっていうか、ストーカーですよ」

人の少ない裏道を、2人ともげんなりして通る。

つい先ほど、怨念の「跡」の最新のものをたどつて行き着いた靈に会つてきた。

怨念持ちとは言え、人間であることに変わりはない。実際、僕は怨念持ちの靈を相手に商売をしたこともある。だが……。

「……とにかく、あの怨念は恨みから来たものではないことがわかりました」

『……だな』

強い恋慕は、時として「呪い」「へと変化する。生きている人間ならばストーカーがいい例だ。

『よくよく考えれば、あいつはすぐモテていた……』

中条さんが『高身長で顔も整つてるし、運動も昔からできたし、家族思いで友達のこともちゃんと考えてくれるし、勉強も仕事もそつ無くこなすし、少し歌が下手なところはそれはそれで愛嬌があるし……』と咳き始め、僕は途中から若干の僻みが混ざっていることに気づいたが何も言わなかつた。

『とにかく、アイツほどの有望な人物なら、モテるのもうなずけるし、ストーカーがいてもおかしくはない』

「……なるほど」

中条さんの力説を聞きながら、僕は思考を巡らせた。

そして、そういえば、と思い当たる。

「……妙なことをお伺いしますが、中条さんって通り魔に刺し殺されたんでしたよね?」

『ああ』

「その犯人つて捕まつたんですか?」

僕の問いに、彼は少しだけ考えてから呟くように答えた。

『……そういえば、知らねえな』

「知らない?」

眉をひそめて聞き返すと、中条さんはかいつまんで説明を始める。

『ああ、俺が死ぬ前から裕一の体調不良は始まつてたしな』

そりや、僕が裕一さんを電車で見たのは結構前だし、体調不良がそこから始まつていてもおかしくは無い。

僕は先を促した。

『死んだつて気づいて、それからすぐに裕一のところに行つて、そしたら今まで見えなかつたすげえ数の靈がアパートに居て驚いて、これが原因なんぢやないかと思つて。

そんで、靈と怨念を知覚できる郵便屋の話を聞いて、すぐにあんたのところに行つたから、あんまり気にする余裕無かつたんだよな』最後のほうはからからと笑いながらそう言つので、僕はさらに眉間のしわを濃くする。

『ていうか、何でそんなこと聞くんだ?』

『……いえ』

これは、少し調べたほうがいいかもしれない。

直感的にそんな気がして、僕は中条さんの質問にきちんと答えることなくきびすを返し、図書館を探した。

『なあ、郵便屋ー』

『……』

僕の後ろを浮遊しながら話しかけてくる中条さんを無視して（図

書館だから不可抗力だ）僕は新聞をあさる。

『俺を殺した犯人なんかより、裕一のストーカー何とかする方法考えようぜ』

6日前の新聞の地方欄に「通り魔殺人、また同一犯の犯行か」の文字を見つける。そして、予感は確信に変わった。

そのまま新聞を片付け、5日前、4日前と新聞をたどつていったが、「犯人逮捕」と言う文字は無い。

それから6日よりもっと前の新聞で「通り魔殺人」の記事を何件か見つけ、僕は気づいた。

裕一さんが危ない。

無言でその場を立ち去り、僕は裕一さんのアパートへと足を進めた。

『おい、どうしたんだよ！

何がわかつたって言うんだ！』

慌てて付いてきた中条さんに聞かれ、僕はできるだけ声を抑えて、だけど確實に返事をした。

「……裕一さんが危ないと言つ」ことが、わかりました。急いでアパートに帰ります」

『裕一が危ない？！どういうことだ！』

血相を変えて僕に問いかける（と言つより怒鳴りかかる）彼に、僕はいつもより数十倍速いペースで歩きながら、質問に質問で答えた。

「中条さん、裕一さんは昔から異性に人気があつたんですね？」

『ああ……だが、今はそんなことを言つているときでは』

「では、靈以外のストーカー被害にあつたこともあるんですね？」

これは、質問と言つより確認だつた。

『……あるが、それがどうかしたのか？』

訝しげに彼は答える。

「……そのときの裕一さんの様子は？」

『氣味悪がつてたよ。

気持ちの悪い手紙やらが届くし、薰ちゃんも凄く怒つてたつてア  
イツがよく言つてた。

裕一が外に出るのもあまりいい顔しないって。またストーカーに  
あつたらどうするのかつて。

兄思いのいい妹だけど、どいつが年上かわかつたもんじやないな  
つて、よく笑つたもんだ

「やつぱり……」

僕が一人で納得して頷くと、中条さんはいい加減しごれを切らし  
て『何が危ないのかつて、聞いてんだよ！怨念の靈は寄つてこない  
ようにしたんだろ！』と叫ぶ。

今度こそはぐらかすことなく僕は答えた。

「今、一番危険なのは怨念の主の靈なんかじゃありません。

「薰さんですよ」

『お兄ちゃん起きないな…………』

兄の姿を確認しながら、彼女は微笑む。

『この怨念が消えちゃえば、完璧に一人つきりなのに』

彼女は微笑みながら「黒い霧」を撒き散らし初めて約3時間。  
他の怨念とは比べ物にならない「どす黒い」霧が部屋中に充満し  
て、彼女の兄の体力は郵便屋が関与する前よりさらに奪われていた。  
『お兄ちゃんと、早くお喋りがしたいのに…………』

このままお兄ちゃんが死んじゃつたら、いっぱい喋れるのかな？

彼女の笑顔は明るい。

まるで周囲の暗さと相反するよつ。

『……なんだ、あれ』

「……」

2人で慌ててアパートに向かい、アパートを見上げた瞬間中条さんがそう呟いて絶句した。

『あれが、怨念か……？』

「はい」

裕一さんの部屋の窓から、真っ黒い、と黒い霧が、次から次へとあふれ出ている。

あまりの「怨念」に、普段は知覚できないはずの中条さんにも、その光景が見えたらしい、彼は呆然と5階を見上げていた。

『……これ、薰ちゃんが』

「はい」

彼の言葉には未だ疑いの念が見え隠れしていたが、僕は何のためらいもなく断言する。

中条さんは僕のほうを見て、悲しげと悔しげの入り混じった声で尋ねてきた。

『……俺を刺したのは、本当に薰ちゃんなのか？』

その言葉は、きっと僕の「否」という答えを待っていたのだろう。

『……断言はできません。が、そうであれば辻褄は合います』

けれど、僕は自分の思っていることを正直に答えた。

『女子高生に、殺しなんてできるのか？』

『わかりません。が、できないと断言はできません』

女の子の腕つ節なんて、運動でもしていない限り高が知れている。だが、決して前例がないわけではない。

『……考へている余裕はありません』

裕一さんが、どれだけ衰弱しているかわかりませんし、薰さんが何をしてくるかもわかりません。

怨念持ちの靈は、普通の靈とは違います

『ああ、わかつた』

中条さんがうなずいたのと同時に、僕は鍵を解いた。

そして、アパートのほうへ歩き出す。

近寄るだけで汗がにじみ始めるような酷い怨念の中で、僕はفردを深くかぶりなおした。

「……」

『……』

思わず絶句してしまつよつ黒い霧は、部屋の中から次から次へとあふれ出でいる。

僕は、深呼吸した後、問答無用でその霧を霧散させ始めた。

怨念に触れる。

消える。

現れる。

近寄る。

消える。

また現れる。

その繰り返しで、ずんずんと部屋の奥へ進んでいく。

進むにつれて僕の額に汗がにじみ始め、前髪が額に張り付いた。随分と霧散を進め、ようやく田の前が見え始めたとき、

『どうして来ちやつたの?』

という、薰さんの無邪気な声が聞こえた。

中条さんが僕の後ろではっと息を呑んだのがわかる。

田の前にいた薰さんは、確かに微笑んでいたが、それは、どこか歪で。

僕は瞬間的に感じた頭痛に少しつめき声をもらしながら、裕一さんの姿を探した。

『折角、お兄ちゃんと2人きりになれると思ったのに……』

そんな僕らを尻目に、彼女は唇を尖らせて『怨念の女を退治してくれるんじゃなかつたの?』と問いかけてくる。

僕らは何も答えず（中条さんは、答えられずの方が近いかもしない）、ただ黒い霧に覆われた部屋を見渡した。

そして、ベッドに横たわり、完全に意識を失つているらしの裕一さんの姿を見つけ、

『裕一一!』

慌てて近づこうとした中条さん、

『お兄ちゃんに近寄らないで』

冷たい声が降りかかり、彼は反射的に足を止めた。

『この疫病神。あんたのせいでお兄ちゃんがストーカーの被害にあつたんでしょう』

『な……』

昨日まで見ていたあの暖かな声とは大違ひの、冷たくて鋭い声に、

中条さんが再び絶句する。

「……だから、中条さんを刺したんですか?他のストーカーの女と同じように」

僕は、額の汗をぬぐいながら、何の感情も混ざらない声でそう聞いた。

『ええ』

彼女は、動けなくなつている中条さんから視線をはずし、僕の方を見ながらうなづく。

『お兄ちゃんは、誰にでも優しくて顔も良くて、だから、ストーカーの被害にも良くあつてた。』

お兄ちゃんに触れる資格なんてないくせに、訳のわからない手紙が郵便受けに入つてしたり、気持ちの悪い女がお兄ちゃんのことつけまわしたり

「……」

彼女の瞳は憎悪に燃えていた。

『お兄ちゃんにそんな思いをさせるなんて、許せない。』

そして、お兄ちゃんのストーカー女は、皆そこの疫病神と繋がつてゐやつらだつた。

同じ職場の課だつたり、学生時代の同級生だつたり……。そこの疫病神とお兄ちゃんが一緒に居るところを見て、お兄ちゃんのこと知つたに違ひないの。

だから、刺した。それだけ

『……』

中条さんは何も言わなかつた。

目の前に自分を殺した相手がいて、でも、何もできなくて。彼の瞳に、いろいろな感情が浮かび上がつては消えていく。まだ生きていたかつた。自分が殺されたことに対する理不尽。だけど、ストーカー女を生み出した原因は自分らしい。裕一さんを苦しめたのは自分だつたのかもしれない。だけど……。

僕はそんな中条さんを見て、それから薫さんに視線を戻した。

「僕を巻き込んだのは、怨念の女を退治させるためですか？」

そして、完全に裕一さんと2人つきりになるために

『そうだよ。

皆死ねばストーカーが居なくなつて、お兄ちゃんと2人つきりになれると思ったのに、お兄ちゃんはそれから訳のわからない体調不良になつてしまつて。

それで、この人刺した後で私も車に轢かれて死んじやつたけど、それで靈つてやつが見えるようになつてよくわかつた。

ストーカー女どもは、死んでも懲りていなければ。

そのときに、怨念と幽靈が見える郵便屋さんの話を聞いたの『彼女はゆるりと微笑んで『怨念が消せるなんてびっくりだつたけど、それにも限界があるみたいだね』と言つた。

私のこの思いは、怨念なんかじゃないから消せないでしょ?とも。

## 郵便屋と怨念（9）

『でも、郵便屋さん、何で私が刺したってわかったの？』

薫さんの問いかけは、あくまで無邪気だった。

僕は左手で怨念を霧散しながら答える。

「最初から妙だと思つていたんです。

怨念をぶつけた主は、ほとんどの場合ぶつけた相手のそばに居るんです。

でも、今回は僕が見ただけで怨念をぶつけた八人中一人。そして、その靈もすぐに居なくなつてしまつた

理由は簡単。自分を刺した相手が現れたから。

薫さんは何も言わずに僕の話を聞いていた。

「つまり彼女たちは薫さんが犯人であることを知つていて、自分を刺した人間が現れることで裕一さんにも近寄れなくなつてしまつた。自分に危害を加えたものに近寄りたいと思う物好きは少ない。中条さんが平然としていたのは、自分を殺した相手を知らなかつたら。

そして、新聞に書いてあつた犯人像が「若い女」であつたので、もしかしてと思つたら大当たりでしたね

『そう……』

僕の言葉を聞き終えた彼女は、『でもまあ、犯人死亡でこの事件は終わっちゃつたけどね』と笑つた。

楽しそうに笑つていた薫さんだが、しばらく笑つた後で、でも、と話を続ける。

『郵便屋さんがそれだけのことわかつちゃうほど優秀なら、もつと早くストーカー女どうにかできるんじやないの？

幽霊は見えるだけでも、怨念は見えるだけじゃなくて消すこともできるみたいだし。

いくらストーカー女の居場所を掴むためだつて言つたつて、もう

少しお兄ちゃんを怨念から開放してあげられなかつたの？

お兄ちゃん、あんなに苦しんでかわいそつたじやない『

僕は思わず頭の痛みでよろけそつになつた。歯を食いしばつてそ

の場にとどまる。

彼女の容赦ない「想い」が僕にぶつかつて、額の汗は顎を伝つた。

『ま、別にいいよ。

もうお兄ちゃんはストーカー女の怨念で苦しんだりはしないもん。

お兄ちゃんは、私が救つてあげる』

そのようすを見た彼女は、ふつと視線を自分の兄のほうへ向ける。完全に衰弱しきつた裕一さんは、もう呼吸すら怪しいのではないだろうか。

『このまま私の想いでお兄ちゃんが死んでくれたらな……』そうしたら、私はずっと、お兄ちゃんと一緒に困られる。彼女はそう言つて笑つた。

『……るな

そのとき、「怨念」に塗れたこの部屋に、小さな声が響いた。

『……何か言つた？』

薰さんは、一変して冷たい表情をその声の主に向ける。

『ふざけるな、つて言つたんだよ』

中条さんは、もうその表情に怖気づくことなく彼女を睨み返した。

『さつきから聞いてりや、裕一のため裕一のためつて……結局全部自分のためだらうが！

ストーカー女たち刺して、俺も刺して、拳句の果てには自分のために裕一も死ね？！

戯言もいい加減にしろ！

その怒鳴り声に、薰さんは静かに反論した。

『戯言……？ふざけているのはそつちでしょ？

私はお兄ちゃんのためにストーカー女を』

『裕一のために、人を殺したって言うのか？！あいつがいつ、そんなことを望んだんだよ！』

中条さんは、今までの緩みきつたふざけた顔からは想像も付かないほど厳しい顔をしている。

思わず、彼女が怯んでしまうぐらい。

『結局、お前が裕一と2人つきりになるのにストーカー女は目障り以外の何者でもなかつた。

そしてその原因となつた俺も邪魔だつた。

結局自分も死んでしまつて、裕一に認識してもらえなくなつたら裕一も死ねばいい？！

人の命なんだと思つてんだよ！』

彼は薫さんに詰め寄つた。

薫さんが反射的に、一步分後ろに下がる。

『俺はまだ、やりたいことがあつた。死にたくなんてなかつた！お前が裕一と2人つきりになりたいっていう願望と同じように、俺にも、裕一にも、怨念女にも、叶えたい願望があつたんだよ！それをお前はつぶして、今まさに裕一の分をつぶそうとしているんだ！それをわかつて言つてんのかよ！』

それは、中条さんの心の叫びだつた。

理不尽に殺されてしまった人間の、心からの叫びだつた。

『……』

それを聞いた薫さんが、黙り込む。うつむいて、肩を震わせて、

『言いたいことは、それだけ？』

彼女は笑つていた。

『ほんつと、なに言つてんのか全然わかんないよ?』  
けらけらと笑うたびに、怨念の量が増えていく。

『ストーカー女の願いなんて、知つたことじやないし、あなたは疫病神なんだから、居なくなつて当然。

それに、お兄ちゃんの願いなんて私は全部把握してるもん。お兄ちゃんはいつでも私のことを考えてくれてて、いつでも私と一緒に居たいつて言つてくれてたし、私が死んじやつたときすつごく泣いてくれたし、いつもいつも優しくて……』

僕には、薫さんの言葉が呪詛にしか聞こえなかつた。

ストーカー女の言葉と、彼女の言葉が重なつて聞こえる。

『つまり、お兄ちゃんは私と居る時間が一番幸せなんだよ?』

中条さんは、目を見開いて、詰め寄つていた分後退した。

『あーあ、靈にはこの「想いの力」通じないんだ。つまらないの。郵便屋さんにはこの後あのストーカー女退治してもらわなきゃいけないんだし、倒れても困るんだけどな……』

彼女の視線が、脂汗を額に浮かべ続ける僕に向いた。

『ねえ、郵便屋さん、早く苦しみから脱したいよね?

だつたらさ、もう、ストーカー女の身元調べとかいいからさ、あの女たちの怨念だけ消してくれない?

私の想いと混ざつて、すゞく鬱陶しいの。ねえ、郵便屋さん?』

ああ、そうだ。

こんなつらい想いをするのはもうたくさんだ。僕は薫さんの言葉を聞きながらそう思つた。

そして、その想いを口に出した。

『……確かに、こんな想いをするのはもうつらつらです、その言葉に彼女が無邪気に笑う。

『でしょ?だつたら』

「でも、」

僕は彼女の言葉をさえぎつて続ける。

「貴女だけがいい思いをするのは、どうも自分の信念と食い違つ気がするんです」

この部屋から早く出て行こうとすることは、「逃げるな」という師匠の教えに背いている。

この部屋の怨念はそのうち外にも影響を及ぼし始めるから、結局僕自身にも被害が及ぶ。

そして、自分以外の人間に一人勝ちさせることは、僕の信念と食い違つている。

「だから、その提案には乗りません」

僕は、久しぶりに人前でフードを脱いだ。

## 郵便屋と怨念（10）

フードを取り、色素が薄くて茶色い前髪を左右に分けたとたん、目の前の2人が息を呑んだのがわかつた。

『なつ……』

『……』

薫さんは何が言おうとして口をあけたまま何も言えず、中条さんは目を見開いて何も言わなかつた。

そもそもそうだろう、とは思つたが、気にしている余裕はない。

一般的な白目と黒目の中が逆転した左目と、粗い縫い目で縫合されて開かない右目。

驚かれるのなんて、日常だし、気味悪がられるのだつて、また同じなのだから。

「……さつき薫さんは、僕は幽霊は見えるだけだけど、怨念は消せる、とおっしゃいましたが、それは誤りです」

そして、僕は2人の反応は無視して勝手に話を進める。

「そもそも怨念が死んだ人間の思いの塊であり、靈も人の思いにエネルギーがくつついただけの存在ですから、いわば怨念と言うのは靈の一部でしかありません。

だから、僕は怨念に干渉することができるのです」

つまり、怨念に干渉できるから靈が見えるわけではない。

僕は、無表情のまま言葉を続けた。

「靈に直接干渉できるから、怨念にも干渉できるんです」

腕を顔の高さまで持ち上げ、人差し指を薫さんのほうへ向ける。

彼女からの怨念の放出は止まつっていた。が、僕は自分が今からやろうとしていることを止めようとは思わない。

「貴女の依頼は郵便屋として受けましょう。

彼女たちの怨念は僕が責任を持つて霧散させます。

だから、これは対価です」

それは、紛れもなく自分自身への言い訳だった。

これは、対価。対価だ。

そう言い聞かせて、僕はいつもは「押さえ込んでる」力を解き放つた。

例のアパートの前に救急車が停車するのを確認して、僕はその場を立ち去った。

フードを深く被りなおし、店へ帰る道をただたどる。

『……』

中条さんが、何か言いたそうに口を向いているのはわかったが、僕は振り向きもしなかった。

僕は勝手に少しだけ傷ついて、フードのふちをぐつと引っ張った。自分で勝手にフードを脱いで、薫さんを「消した」癖に、そのことで恐れられて傷ついて。

馬鹿みたいだ。ていうか、馬鹿だ。

自嘲気味に小さく笑つて、ポケットに手をつっこむ。

『……おー』

だから、声をかけられたのは本当に驚いた。

「……何ですか」

驚いたが、僕は振り返らずに足だけ止めた。

おそらく、この日のことと力のこと、聞かれるだけだろう。

中条さんに背中を向けたまま、口元をゆがんで彼の言葉を待つ。

『薫ちゃんを、どうしたんだ?』

ほりみろ、僕は中条さんのほうを見ないで、口の端をかいつぶつ上げた。

「どうした、とは?」

『……郵便屋が手を翳したら、薫ちゃん消えたじゃん?』

『……どこに行つたんだ?』

僕はゆっくりと息を吐き出しながら答える。

「彼女はどこかにいったわけではありません。

僕が彼女のエネルギー……所謂魂を吸收しただけです」

『吸收?』

彼が首をかしげている様子が目に浮かんだが、やっぱり振り向かず僕は淡々と答える。

僕の「本当のこと」の一端を、僕は中条さんに伝えた。

「僕は、その生死に関わらず、人の魂を吸收してしまう体質なんです。

いつもは無理やり抑えているんですけど、緊急事態だったので開放させていただきました」

僕のその言葉に、彼は少しだけ考えて質問を返す。

『……じゃあ、薰ちゃんは消えてなくなつた、ってことか?』

「はい」

『……』

中条さんが黙り込み、僕も何も言わなかつた。

彼はこのまま無言で立ち去るだらう、と決めて、そろそろ歩き出そうとしたとき、

『ありがとな』

という中条さんの声が聞こえて、僕は、反射的に後ろを振り返つた。

きっと今、酷く間抜けな顔をしているんだろう。

わかつていたが、他に表情を取り繕えるほど、今の僕は冷静ではなかつた。

『え……?』

口をぽかんと開けたまま、これもまた間抜けな声が零れた。

『本当に、感謝している』

中条さんの口が動くのを思わず凝視する。

感謝? 何が? 誰に?

言葉の意味を理解することができない僕に、中条さんは少しだけ

苦笑した。

それから、僕のそばまで近寄ってきて、『そういう表情なら歳相応なのにな』なんて、余計なことまで呟く。

中条さんは改めて、と言った様子で頭を下げる。

『裕一を助けてくれて、ありがとう。

薰ちゃんは……正直、自分を殺した人間に同情なんてできないから、正直敵を討つてもうえたような気分だ。

本当にありがとうな』

「……いえ、別に」

他に、返す言葉が見つけられなかつた。

別に、裕一さんのためではあります。ましてや中条さんのためでもあります。僕のためです。

いつもだつたらそう言つてはいるはずなのに、なぜか僕は中条さんを見上げたまま、それ以上何もいえなかつた。

そして、余計なことだけは尋ねていた。

「……僕のこと、気味悪くないんですか?」

『は?』

「いえ、田、とか……」

無意識のうちに尋ねていたから、最後のほうは口もつてしまつ。

……何を聞いているんだ、僕は。

今の質問は忘れてください、と言つ前に、目の前の彼はにかつと笑つた。

『さつきまで、あんだけ嫌一な空間に居たんだぜ、俺ら。

そこから開放させてくれたやつを気持ち悪いなんて、思つわけないだろ?』

そして、僕の中でその笑顔が、ブイサインと共に、にまつと笑う師匠と重なる。

「……そり、ですか」

それ以上、何もいえなかつた。

またの『ご来店お待ちしています、なんて、なんだか間の抜けたこ

とを返して、僕は歩き出す。

中条さんは『おう、また俺が地上にいる間に邪魔するなー』と言つて、裕一さんを乗せた救急車を追いかけていった。

「……」

独り残つた僕は、また店に通じる道をたどり始める。

中条さんは、あの気持ち悪い空間に居たから、僕のことはどうは思わないと言つた。

つまり、普段の状態で僕の「田」を見たら、どう思つたのかなんてわからない。

そこまで考えて、僕は思わず苦笑してしまつた。

「……何被害妄想してんだ、僕  
大体、あの状態じゃなきやこの目も力も解放しなかつただろ。全てを受け入れてくれる人間なんて居ない。師匠もそう言つていたじゃないか。

「……こういう時、どうしたらいいんだろ」「喜んでいいのか、それとも当たり前のことだと思えばいいのか。氣味悪がられるのがいつものことで、滅多にそうでない物好きは居ないため、僕は自分の心をどう表したらいいのかわからず、頭を搔いた。

「……」

「 今日も平和だ。 」

いつもどおりまばらにやつてくる依頼人の手紙を書き、配達に行き、一息ついた昼下がり。

僕は小さく息を吐きながら、口元に笑みを浮かべた。

今日はなんだか、すごくいい気分だ。

平和な時間、当たり前の毎日、といつのは、こうも充実したものだつただろうかと、改めて実感したような気がする。

畳に寝転がつて、昼寝でもしようと布団を頭からかぶつた。

「 今日も平和だ 」

口に出して言うことで、さらにその想いを感じる。

たとえそれが、自分が感じている「嫌な予感」を払拭するためのある種の現実逃避だとしても。

自分の嫌な予感が大抵外れないことを知っているからこそ、現実逃避だとしても。

布団を被りなおし、睡魔に身をゆだねようとまぶたを閉じて、

「……」

僕は瞬間的に飛び起き、ドアに鍵をかけ、それから生死に関わらず人が入れないよう「鍵」をかけた。

その行動に3秒もかけず、僕はシンとしているドアから離れて畳の上に座り、耳をふさぐ。

次の瞬間、

「 うおーい！ 何で鍵かけるんだよ！ 開けろよー！ 」

というなんとも近所迷惑な叫び声と共に、ドアを壊れんばかりの勢いで叩く音が響いた。

「 2年ぶりの再会なのに冷たいじゃねーか！ 」

僕は耳を、ふさいで何も聞こえない、と皿口暗示をかける。

「お師匠様を敬愛するという意思はないのか愚かなる弟子よ…」

敬愛に値する行動を田代からされていたら、僕だつて歓迎しますよ！と心の中でつっこみかけて、無視を貫くことを思い出した。

僕がいつまで経つても扉を開けようとした時に痺れをきらせ

たのか、ドアを叩く音が大きくなる。

「ちっくしょーーー！」の金誰が払つてやつていると思つていいんだ！水道代も電気代も、俺が払つてやつているだらつー差し止めることはいつだつてできるんだぞ！」

それはただの脅しだ！という僕の心の叫びと共に、「ガシヤ」というあつけない音で扉の蝶番が壊れて扉がこちらに倒れてきた。

「全く、最近の若いやつは、年上を敬うことも分からぬのか。嘆かわしい」

その先に居たのは、2年前と全く変わらず派手なアロハシャツに身を包んだ「老体」で、

「元気そうじやねえか、バカ弟子」  
僕を見てにやつと笑う師匠だった。

そのままずかずかとドアの上を通り、師匠は僕の目の前に立った。蛍光ピンクの生地に青のハイビスカスが目に痛いアロハシャツを強調するように僕の前で胸を張る。

「……師匠もお元気そうですね」

「そりゃあ、お前なんかとは鍛え方が違う」

とりあえず、無難な返答は何か考えた結果行き着いた返しに、師匠はさらりと得意げに言った。

年齢的にはまだ中学生で成長期真っ只中の僕とほとんど変わらない（むしろ師匠のほうが少し低い）身長は、2年前より少しだけ僕のほうが高くなつたような気がするが、それ以外は何の変化もない。相変わらずの白髪は無造作に輪ゴムで結ばれて、特に日が照っている日でもないのに顔に合わないサイズのサングラスをかけ、服装

に関しては前述の通りだ。

「郵便屋の仕事もしつかりやつてているみたいだな。

まあ、2年間の思い出話はこのドア直しながら聞こいづじやないか」

「……」

僕は師匠が上を歩いたことによつてさうに壊れてしまつたドアを見つめて、もう一度ため息をついた。

僕が後ろの戸棚から工具を出すのと同時に、師匠がさつきまで僕が座つていた畳に座り込んで「炭酸はないのか!」と叫んでいるが無視することにする。

とりあえずドアを立て、蝶番以外の破損状況を確認した。

師匠が踏んだことにより部分的に陥没してはいるが、大破はしていない。

僕は木製のドアの壊れた蝶番をきちんとはずしてから新しい蝶番を取り付けにかかった。

ドライバーを手にしたところで、

「冷蔵庫にメロンソーダならあつたと思ひますよ」と師匠に声をかけた。

瞬間に師匠は部屋に備え付けられた一人用の小型冷蔵庫に飛びつく。

僕は飲み食いはしないから本当なら冷蔵庫も必要ないのだけれど、「俺がいつ帰つてきてもいいように炭酸飲料は絶対切らすな!」と言ひ、冷蔵庫は自分が使つていたそのままで出て行つた師匠の教えを律儀に守つてしまつていた。

「さつすが、俺の弟子だな」

嬉しそうにペットボトルを抱える師匠を見て、僕はようやく思い至る。

どうして、師匠は突然帰つてきたのだろう? 何故、今?

そう尋ねようかと思ったが、この人の行動に何か意味があるとは思えなかつたので、どうせ気まぐれだろうと「う考えの下、僕は質問するのを止めてドアを直すことに専念した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4472x/>

---

郵便屋 -死者の声届けます-

2011年11月20日03時22分発行